

## 農家の四つの間取りの研究

——農家における子供の自我の生活の発展と住居——

持田照夫 持田昭子  
深沢大輔 若杉幸子

### 本研究の意義

凡そ、新しい研究が行なわれるには、それについての「意義」がなければねらない。本研究もいくつかの意義を持っている。存在理由または出現理由があるというわけである。それを次に記そう。

農家の研究はし尽くされたか：「農村住宅の研究に関しては、まだ未解明の問題が存在している」ことを主張し、その存在の事実を示し、解明に向けて光を当てたこと。

これまで農家に関する研究はあまたなものになっている。数においても長大なものになっているし、探究の方向も多方面なものになっている。

そこで、次のような憶説もささやかれるのである。「農家住宅に関する研究はすでに『し尽くさ』れてしまった。これからは、やるテーマもない。」と。このような説は公的な発表機関や機関誌上で言明されたことはないが、学会の一部では風説として陰に陽に語られており、日本建築学会の重要な会議等でも、一部の人々によって屢々主張されている。人によってはこの結論を神話のように信じているかも知れないが、しかし、現実はこのような説とは全く違っていると言わなければならない。例えば、集会と接客の関係・接客の意義（接客の全体生活の中で持つ意味）等の問題一つをとってみても、実質的には何ら解決していないのである。

だから、研究完了説に対して「いやいや、農家住宅の研究はまだまだ分からないところが沢山ある。極端に言うなら『何も分っていない』とさえ言えるだろう。これからはやるべきテーマは沢山あるのだ。」と言う、研究未完了説を解く論者も出て来るのである。このような論者の中には、日本建築学会賞を受けたような著名な研究者もいるのである。

本研究は、以上示した論争点に関して、論の構成自体をもって、『農村住宅の解明はこれからである』ことを示したつもりである。本研究を、以上述べた論点解明の論文として見ていただきたい。

### まえがき

本研究を分けて次の章にまとめた。各章毎に担当者が異なる。が、全体を持田照夫が責任をもってみた。尚、神戸信俊は届出の研究者ではないが、論文作製に協力したので、該当論文末尾に名前を出しておいた。

ここに提出したのは、本論文にするための予備論文乃至部分論文である。何をしようとしたか、結果がどのようであったかを分ってもらい論文である。従って、本論文はより大部なものになるし、論証もより多くの事実根拠にしたものにし、数字的にもとり扱うつもりである。

また、この論文全部が本研究費で遂行できたわけではない。1章の「農村住宅の平面の動向」を調べるために1,200戸程の農家平面を採取し分析したことで殆んど使果したのである。が、一連の研究であるので、3章以下もここに採録させてもらうことにした。

序 農村住宅の平面に関する問題点と、それを解明するための研究の方法、及び研究の概要

持田照夫

1章 農村住宅の平面の動向 持田照夫

2章 農村における社会生活と農家の間取り

深沢大輔

3章 農村における子供の生産生活と農家の間取り

若杉幸子

4章 農家住宅における子供の自我の生活の発展

持田昭子

5章 農家の間取りを形成させる力の構造

持田照夫

序 農村住宅の平面に関する問題点とそれを解明するための研究の方法、及び研究の概要

### 1. 農村住宅平面の問題点・問題の構造モデル

1) 農村の人達は都市住宅の研究の成果である〈平面計画の考え方〉を受け容れようとしなない、これは何故か。

都市住宅の研究の成果は、あまたにわたるが、中でも重要なのは〈公私室型〉の間取りをつくるとか〈北入り口〉または〈西入り口〉の玄関にするとする考え方などであろう。これらは、農村住宅改善のための教科書の中

にまず出て来て、次にモデル住宅にとり入れられ、更に八郎瀧干拓等の大規模建設のプランを作成する時の問題として、実際建設にとり入れられたのであるが、これ等は実際には農村の中から大なる反発を蒙っており、受け容れられていない。

この反発は、ただ単に都市住宅の原理を農村に持ち込んだから出て来たものではない。それは、“農村でも都市でも、住宅という点に関しては同じ住宅なのだから、住宅一般の原理として考えることができる”と言う、建築学の世界や建設設計を職とする人達の間でひろまっている一つの考え方からも来ているのである。この考え方は、実は学問的には未証明の問題なのである。私は、住宅が形づくられるについては、現在の都市住宅を形づくる原理でもなく、農村の住宅を形づくる原理でもない、否その2つを併せて含んでいるより高い平面形成の原理があって、農村はAの段階にあるが、都市はBの段階にある、と言うようなものであろうと考えている。従って、やはり“住宅一般を形づくる原理”と言うものは存在すると考えているが、それがすなわち都市で研究された結果のものであると言うわけに行かないとも考えている。このことの論考は5章に、形をつくらせる背後の力の問題として採りあげておいた。

しかし、こゝでおそらく2つの疑問が湧いて来ると思う。一つは「お前は反発反発と言うが、建築家や研究者の説得の努力が足りないのではないか。また反発の実態はあるのか」と。これに関しては個人的体験並びに近代的農村住宅として建てられたところ、例えば八郎瀧の住宅等を調べて分ったことで、こゝでは詳述できないが、沢山の例がある。また、どのような平面を望んでいるかを知るために、『生活』の調査をしてそれを知るわけであるが、この生活を従来のように<寝><食><団楽>等と分類したのでは分からないのである。“ムラ”というものをあらわす<生活構造>があって、それに則って<諸行為>をとらないとならない。この<生活構造>は、個々の生活が或るバランスをもってまとめられでき上っていると考えられるものであるが、このように<生活構造>的思考を背景乃至基盤にして調べないと分らないと言うことである。もし、この考え方を採るなら、研究対象は何も新築の家に頼る必要もない。どう言う<生活構造>にはどう言う<平面>が対応するか、と言うことがわかるから、我々は古い家に住んでも新しい生活構造をしているなら、その構造が要求する平面を与えることができるからである。新築しない家、古いまゝの家を調べても、都市住宅の研究結果から導き出された新しい平面計画原理（実は“生活を律する原理”）が、受け容れられているのかそれとも反発されているのか、がわかるのである。

次に、では農村では今后「どんな方向に行こうとしている

のか」という疑問が起こるであろう。これに答えるために、平面を採取し、その動向を調べ、更にその中のいくつかについて生活の精密調査をしたのである。これらは、本研究の各章を構成している。

農村が、都市生活原理（都市住宅計画原理を更に生活原理にした）を受け容れないのは何故か。これは在来の言い方で言えば、“生活が違うから”である。ではどう生活が違うのか。以前は、生産が家の中にまで影響しているからと言われた。しかし、現在では生産は家の外に出され、極く限られたものしか家の中ではやられていない。

次に接客であるが、これは依然として家の中で行なわれており、大きく残っていると言えよう。しかし以前とは異なった形になっている。新しい接客が異なった形になったとき何故家の中に残るか。接客は何を意味するのか。このことについては、建築計画の中で答えが見出されないばかりでなく民俗学や文化人類学等の学問分野でも明確な答えを示してくれない。従って、われわれは独自に判断の基を築かなければならないが、こゝでは現象を主にして接客が家の中で行なわれなければならない必要度を測定して行く方法をとった。2章がこれに当たる。

2) 農家の平面は<公私室型>ではなく、田の字型・中廊下型・2間続きに個室、という所謂「四つ間型」系列の平面になりつつあるのではないか。

農家は、一遽に<公私室型>に行くであろうか。行かないのではないか。むしろ、古いと言われた、「四つ間取り」系列のものになっているのではあるまいか。このような仮説を立てて調べる。第1章はこれに対する答えである。結果を先に言うなら、1,146戸調べたところ、上記の予想は全く当たっていたと言うことである。このことを調べるには、なるべく多くの平面採取が必要で、こゝでは前述したように1,146戸採った。その中の159戸の農家が、過去8年間の間に改築された。その平面の推移は、1章の中で示す通りであるが、これは大方の建築家や研究者の予想に反したことであろう。この傾向の中にも、我々は都市住宅設計原理に対する「反発」を見てとることができるのである。

3) 接客は家と社会との関係として考えなければならないのではないか。

これまで接客の問題は、その行為自身はとりあげられていたが、その意味については考えられていなかった。マルセル・モースは、人と人とのつながりを物の贈与と言う面でもとらえた（贈与論 弘文堂）。レヴィ=ストロースは、物の交換を人の交換にまで拡大して、人間の集団化の原理を探った。私は、人をもてなすことも人の集団化の要素になると考える。そして、人には集団化しな

ければならない何らかの理由がある。農村においては、以前は農家の集団化は、その家が存立するか否かにかゝっていた。従って、もてなしは細心の気が配られ、或る順序を踏んだ形式に則って行なわれたのである。自分の家の中で行いとは言っても、社会のつながりのなかで生起する生活事象であるから、その家の恣意的な方向で左右できない。一言にして言えば、“ムラ”的な生活行為なのである。

これが、昔はどうであって、現在どう変っているか。現在でも、なおかつ上述のような考え方は必要なのか。この辺のことについて追求したのが、2章の社会生活と農家の間取りの論文である。これを更に深めるには、精密調査の資料全体に当たって見なければならぬが、それは本論文で果たしたい。ここでは、典型例の例示にとどめる。

また、この問題はくわしく調べれば調べる程問題が分かってくる。正月の意義・盆の意義・お祭りの意義・結婚式の意義・葬式の意義等。これらに関しては、法社会学で千葉氏がかなり詳しい報告（弘文堂“祭りの法社会学”）をしているが、捉え方が「通過儀礼」となっているため、われわれへの示唆がうすめられている。私はこれを、〈生活の枠組みの再組織乃至確認〉と捉えている。

これは、前に述べた、E. デュルケーム、M. モース、C. レヴィ＝ストロース等フランス文化人類学（フランスでは社会人類学）の流れを汲み、更に私なりの変成を行なって生れた理論の上に成り立っている。

4) 昔は子供まで生産の中の単位であり、時間も空間も与えられなかった。しかし、現在では家の仕事にも参加しないし、家屋の中の生活分子として認められないと言うこともない。

子供は、小学校時代から農業に参加したのか。一人前として働き出したのは何時からか。高等小学校を卒業してからかその前からか。そして、ヘヤをもらって家の中に定着できるようになるのはいつか。このようなことを探り、更に現在の農村の子供達が何才でヘヤをもらうのかを調べて対比し、生活の進化に対する生産参加の条件、接客の変化、家の中での子供の尊重のされ方、等の影響の大きさを知るのである。

たゞ、生産参加の問題は、教育上では好ましい面もあるので、時間を与え場所を与えることがすなわちよろしいということにはならない。その子供の全面発達を促すものにして行かなければならない。現在、機械の大型化・技術の高度化等のため、子供はだんだん生産に入りこめないようになっているが、在来の耕作法の田畑や自家用野菜・庭木などは手伝うことができるので、家族の間で大いに工夫して土や植物に接しさせるのがよいであろう。現在は、あまりにも受験競争的な世の中になりすぎているから。

5) 従来、個室があるかないかで子供の生活を見て来たきらいがあるが、個室化する前に子供は一まとまりとしての自分の生活を完成すべく努力し模索して来たのではないか。

この自分の生活の完成を、私は〈自我〉と呼ぶことにした。それは、この完成の方向が行きつくところは、“自己の世界の確立”だからである。“自分固有の世界の完成”だからである。これは、平面の変化・生活の変化をたんねんにたどると分かる。

4章ではこのことを扱っている。われわれは、子供が何気なくカバンを家の中に放って行く行為の中から、その家の中を貫いているその家の生活秩序を知ることができる。この秩序は、或る整序されたものが上から与えられてできるのではなく、上の力と下の力・右の力と左の力等のかみ合いバランスの上に成り立つものである。ここでは、子供が生活を築き上げる、それを家の都合でこわす、また子供が築き上げる、このような繰り返しの中から、段々と子供の生活が拡大し、その存在を認められ、そして遂にヘヤとして安固な場所を与えられるにいたるまでの経過を調べる。

ここでは生活を、生きるために必要な生活、社会一般に必要な生活、一寸抜き出た生活、更に贅沢な段階、等に分けて考察したが、行為別に分ければ〈寝〉〈フトン収納〉〈着がえ〉〈着物収納〉〈勉強〉〈勉強用具〉〈勉強道具置場〉〈遊び〉〈遊びの導入路〉〈交友〉〈交友入り口〉〈家族の関係〉等であり、これらが個室にまでならないとしても、一つところに凝集しつつあるということで、この生活凝集の状態・程度を見るのである。

このことを見るために、本章では、「三世代調査」という方法を採用した。同じ家を、三代の直系が使用したとき、その使用方法がどう変化するか、また夫々の世代で矛盾はどこにあるか、を見るのである。こうして、生活の変化発展の状況と、空間の受容限度のようなものを読みとるのである。この方法で見ると、子供の主体の生活形成力は世代が下がる程強くなるが、それを満たしてやる外的条件は必ずしもそうはならない。まず、社会的な面では以前と違って親は子につくすようになった。また、前にものべたように、子供の生産への参加は後退した。以上二つの面で、子供の自己の生活形成にとっての好適な条件がつくられた。が、接客が変わらないことと平面が同じであることの2点では、三世代とも条件が同じになる。これらの総合の結果として、子供の生活は一ところへのまとまりは或る程度見せるものの、仕切りをしたり目貼りをしたりするような個室様のまとまりは満たせないでいるのである。

以上の状態を調べ、背後にある力と関連させて考察するのが4章である。この三世代調査は、3章の子供の生産活動への参加と農家の間取りの研究や、2章の社会生活

と農家間取りの研究でも、同様に必要であり行なった。

6) 農家の平面を決めるのは、大工や建築家等建設側のものであろうか、それとも生活構造を基盤にした平面形成力であらうか。

私は、後者であると考えている。大工が間取りを構想する場合でも、はたまた設計者が平面を画く場合でも、それは意識的であるか無意識的であるかにかゝりなく、施主側の意図を体して表出されるということである。それは意識的であるかにかゝりなく、施主側の意図を体して表出されるということである。

## 2. 研究の方法

### 1) モデルビルディング

このために、長い間のケーススタディが必要であった。農村に深く立ち入り、表面に現れたものの底に流れる意味を探るには、農村事情がよく分かり、不明なところは細かく訊き正すことができる対象が必要であった。さいわい、10年以上故郷に帰って研究しているので、親類・知己という面で生活の状態・その基盤がよくわかるし、方言が分かるから細かいところまで訊問することができた。このようにしてモデルビルディングをすることができたが、それをすることによって、本調査をする前に長い準備研究が必要であり、その準備も対象を選ばなければならないし、逆に自分をどこに置くかを考えねばならないことが分かった。

もう一つ、建築の研究だからと言うので、建築研究の論文だけに頼ると物事の真相に迫れないことも分った。私は、〈住宅〉の研究は〈生活〉の研究を基にしなければならず、〈生活〉の研究の内容は〈生活構造〉の研究でなければならず、人間の〈生活構造〉を研究するには〈人類学〉的思考が必要であることに気がついた。しかし、人類学もその中は幾つもの考え方に分かれている。その中から、生活・建築を説明するものを選ばなければならない。私は前にも述べたように、E. デュルケーム→M. モース→C. レヴィ=ストロースの系列の考え方と内容を参考にしよう選んだ。がもう一つ、E. デュルケーム→L. レヴィ=ブリュール→柳田国男につながる考え方・調査事実をも参考にした。前者は、人と人との結びつきの基本を考える上で大切であり、後者は日本のムラ社会を考察するのに是非必要だったからである。

### 2) 準備調査

群馬県赤城山の南麓にひろがる村々の農家で、話をきくことができる家にケーススタディ的に入って訊いた。前橋市旧下川淵村地区鶴光路（私が生れたムラ）・寺家・竜門、同市旧上川淵地区上佐鳥等である。また、桐生

市の北部旧梅田村にも入った。その他、前橋市上沖や佐波郡玉村町、利根郡白沢村、新潟県栃尾市葎谷、茨城県阿見町・山之庄等の農家を調査した。

### 3) 調査対象(人)

すでに述べたように、同一の家屋に住んだ経験のある三世代の、子供の時代の生活を訊いた。しかし、これと対照的に、家屋を新しくした家に入って訊いて見た。両者共、一戸で三部またはそれ以上の調査票が必要であった。一番の年寄り世代を㊦、次を㊧、子供を㊨とした。三者とも男女が混じっている。

### 4) 調査項目

まず生涯の生活履歴をきき、次に子供（小学校5～6年生）時代の生活実態をきいた。1日の時間配分と仕事分担、勉強と遊びの場所と道具、身のまわりの始末と与えられた用具空間、交友等を調査したのである。この他、これらを規制する条件として、生産行為の住宅内への侵入状況・冠婚葬祭の住宅使用等の状況をきいた。子供の生活の状態を見ることによって、〈子供の自我〉がどれ程芽生え進んだかを知ることができた。

### 5) 調査期間

昭和50年4月から昭和51年7月に至るまでの長期にわたった。精密調査であるので、一度調査したところに落ちがあるとまた補充で入るといふように、くりかえし調査した。従って、現在でも落ちがあるので調査はまだ完了していないことになる。

昭和50年4月から夏にかけて、一部準備調査をし、夏から秋にかけて討論・モデルの構築を精密化させ、本調査準備にかゝった。がその途次平面の動向を大量にとることがまず必要であるし、採ることができる条件があることが判明し、この研究費はそれにふり向けることにし、冬に1,146戸の平面採取をした。この平面は、過去8年間の平面の動向が分かるので、過去8年間に平面の変化した農家159戸をその中から選び出すことができた。

精密調査は、約60戸をその後行なった。

### 6) 調査員

この研究は、建築研究に関係のない高校生や一般大学生を備って行なうことは、内容がむつかしいのでできない。また、建築関係の学生や研究者でも、内容がよく分かっている人でないと参加してもらいわけに行かない。いきおい、4名の研究者とその周辺の、この研究を理解している若干の人々によって行なうことになった。従って、研究は一般のものより辛いものとなったと思う。金もそれだけかゝったのである。

### 3. 研究の概要

#### 1) コーズ(主張)の確立

〈子供の自我〉という面で見なければならぬことが、これまでの研究及び準備調査の間に分かってきた。これは、更に言うなら、子供以外の成員(例えば老人)をも含めて、〈生活主体の世界の完成〉と〈それを遂げさせる内的・外的条件〉の研究と言うことになる。プライバシーの問題などはこの中に含まれてしまう。〈自我〉は〈プライバシー〉を含み、それより更に広い概念なのである。

準備調査の段階で、このコース(主張)の確立ができたことが大きい。更に、それを遂げさせる側から見れば、自我と自我がぶつかり合うのであるから、両自我より更に上に立ったものが、両者を〈処遇〉する問題と言うことになる。これも、準備調査の段階でわかったことなのである。そして、この問題の基礎として〈生活構造〉の生活のみでなく、その関わり合いの問題として〈生産〉〈儀礼〉の問題も調査し、生活の全体のバランス、それを呼びおこしている力を考察することが大切であることがわかったのである。

#### 2) コーズ(主張)の検証

本調査でこれを行なった。結果は、予想していた通りであるが、一般の世間の常識とは異なるものもあろう。

#### 3) 残された問題

このような問題・問題の見方が、他の地域にも通用するのか、を検証しなければならない。そのため、旧い生活様式が残っているところに焦点を当てて見て行く必要がある。私の見るところでは、対馬・九州西部及島嶼・九州南部及島嶼・沖縄の中に、目的の地域を発見できるのではないかと考えている。現に、対馬では良好なサンプルにぶつかっている。また、開拓された北海道、ここを探ることによって、私が打ち立てた仮説が真か偽か、それともより高い認識への第一歩か、が判明する。

## 1章 農村住宅の平面の動向

### 1. 問題の提起

- 1) 農村では〈田の字型〉農家は減りつつあるのか。
- 2) 農家に〈公私室型〉的な新しい住宅が普及し増えつ

つあるのか。

これらが、われわれが知りたいところであった。そのため、大量調査をして実態を掴む必要に迫られた。茨城県八郷町約6,000戸中略1,200戸に当り、1,146戸の平面が得られた。

### 2. 調査の概要

#### 1) 何故八郷を選んだか

まず、四つの間取り、中でも田の字型の農家が残っている地域であり、それも平家で2階がない地方、それは伸びよう伸びようとする子供の生活を、田の字型の中でどう処理しようとしていたかを知りたかったからであるが、それにわれわれが手近に研究できる位置にあり、我々がある程度の予備知識も持っており、今後も2階建ての群馬県の農村住宅における生活と比較できる地方を選ばなければならないと言うことで、その条件に一番適している茨城県八郷町を選んだのである。次の年は、別の研究で群馬県赤城南麗の2階建ての農家の調査をすることになっている。“平屋田の字型農家における生活”と“2階建て田の字型農家における生活”の比較研究のためである。

#### 2) 何故大量にとらねばならないか

これはいうまでもないことであるが、採ってみると結果は意外なのに驚く。採られた平面中、近代的と言われる都市式の〈公私室型〉は、見当たらないのである。或いは、分類不能の中にあるのかも知れないが。しかし、これは全くの驚きと言ってよいであろう。このような結果を出すためにも、大量調査は或る意味で必要なのである。但し、これが万能ではないことは周知のことである。事の本質は、その内部の矛盾の姿、その矛盾の発展のし方の中にあるのであるから。このことを満たすのが精密調査である。

#### 3) 変化の様子を掴むことが肝要

ただ大量にとってもそれだけではダメで、その中における変化をとらなければならない。この変化が、残る制限された意味ではあるが、将来の姿を教えてくれる。今回は、8年間の変化を採った。

## 3. 調査結果

### 1) 八郷町

筑波山の東麗にあるまわりを山で囲われた馬蹄型塩地状の集落地で、8つの旧町村が合併して現在の町になった。普通の水田主村や畑主村とは異なり、いくつもの小さな平地や谷に分れた集落は、豊かな山林を持ち田畑は

そう多くない農家で構成されている。が、住宅は木造・瓦葺き・白壁の本建築が多く、他の地方に見られる新建材住宅は極く少ない。

2) 対象の抽出

全町 5,964 戸住宅中、表に示す集落につき、1,146 戸の平面を採取。それを型別に分類するとともに、過去 8 年の間に変動した分については、住宅型新旧変動表を作成した。(表-1)

3) 平面型分布

表-2 並に表-3 に見られるように、四つ間型のうちの田の字型(B)が圧倒的に多く、四つ間系の中廊下型(B')を加えると、その勢は全体の半数近くになる。更に田の字に+αの形の(A)を加えると田の字系は6割にもなる。また一列型2間(D<sub>2</sub>)が次に多く、全体の約1/6を占める。二列系一列系合せて8割を占め、田の字系(二列型)：一列型の昔の対立をそのまま残している。

分類不能の平面も全体の約1/6弱あるが、実はこの内容が大切であろう。が、これが非農家世帯の多い集落に集中していることを考えると、農家はこの中に含まれる率が少ないと見なければならぬ。従って、農家の動向を占うには、この分類不明に頼るよりも、8年間の平面の変化に頼る方がより有効であると判断される。

表 - 1

| 地区名 | 字名  | 戸数   |    |
|-----|-----|------|----|
| 小幡  | 中山  | 34   |    |
|     | 上青柳 | 41   |    |
|     | 下青柳 | 63   |    |
|     | 林   | 上林   | 76 |
|     |     | 浦須   | 35 |
| 園部  | 宿山崎 | 65   |    |
|     | 南山崎 | 70   |    |
|     | 東山崎 | 55   |    |
|     | 張間  | 22   |    |
|     | 川内  | 14   |    |
|     | 宮ヶ崎 | 8    |    |
|     | 新谷  | 43   |    |
|     | 上谷原 | 21   |    |
|     | 上郷  | 33   |    |
|     | 瓦会  | 部原   | 42 |
| 小桜  | 菖蒲沢 | 52   |    |
|     | 仏生寺 | 21   |    |
|     | 辻   | 29   |    |
|     | 柴内  | 54   |    |
| 恋瀬  | 太田  | 97   |    |
|     | 中戸  | 89   |    |
|     | 小見  | 130  |    |
| 芦穂  | 上根  | 52   |    |
| 計   |     | 1146 |    |

表 - 2

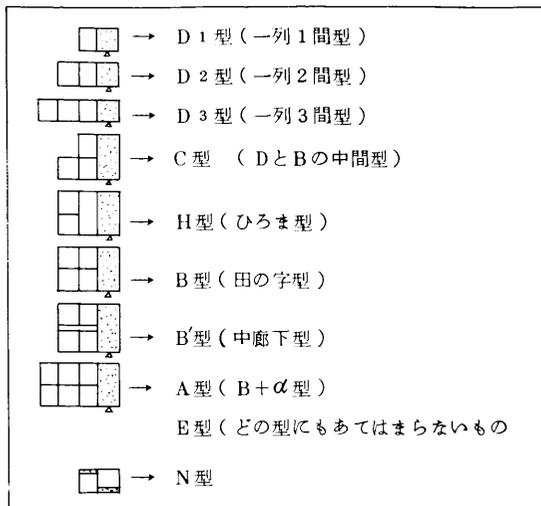


表 - 3

|                | 中  | 上  | 下  | 上  | 浦  | 宿  | 南  | 上  | 新  | 宮 | 張  | 竹  | 上  | 東  | 部  | 菖  | 仏  | 柴  | 太  | 中  | 小  | 上   | 計  |      |
|----------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|------|
|                | 山  | 柳  | 柳  | 林  | 須  | 山  | 山  | 谷  | ヶ  | 崎 | 間  | 内  | 山  | 崎  | 原  | 沢  | 生  | 内  | 田  | 戸  | 見  | 根   |    |      |
| A              | 3  | 10 | 6  | 12 | 2  | 15 | 4  | —  | 6  | 3 | 1  | 1  | 8  | 8  | 3  | 7  | 1  | 7  | 4  | 14 | 13 | 15  | 3  | 146  |
| B'             | 7  | 6  | 27 | 25 | 18 | 25 | 24 | 7  | 12 | 3 | 5  | 2  | 14 | 31 | 12 | 26 | 13 | 12 | 29 | 39 | 44 | 26  | 22 | 439  |
| B'             | —  | 2  | 7  | 8  | —  | 3  | 5  | 1  | 2  | — | —  | —  | —  | 1  | 3  | 1  | —  | 1  | 3  | 8  | 7  | 10  | 2  | 64   |
| D <sub>1</sub> | 4  | 1  | 2  | —  | —  | —  | 1  | 1  | —  | — | —  | —  | —  | 1  | 1  | —  | —  | 1  | 1  | 1  | —  | 1   | 3  | 18   |
| D <sub>2</sub> | 11 | 4  | 7  | 12 | 1  | 9  | 17 | 4  | 8  | — | 7  | 2  | 4  | 7  | 14 | 8  | 5  | 4  | 6  | 12 | 11 | 22  | 12 | 187  |
| D <sub>3</sub> | —  | —  | 4  | 3  | 1  | 2  | 3  | 4  | 3  | — | 2  | —  | 1  | —  | 1  | 3  | —  | 1  | —  | 4  | —  | 5   | —  | 37   |
| N              | 2  | —  | 1  | —  | —  | 1  | —  | —  | —  | — | —  | 1  | —  | —  | —  | —  | —  | 1  | —  | 1  | 1  | 1   | —  | 9    |
| C              | —  | —  | —  | —  | 1  | 3  | 2  | 1  | 2  | — | 2  | 1  | —  | 2  | 3  | —  | —  | 2  | —  | 1  | 1  | 4   | 6  | 31   |
| H              | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —   | —  | —    |
| E              | 4  | 4  | 6  | 11 | 9  | 6  | 14 | 3  | 10 | 2 | 5  | 7  | 3  | 6  | 5  | 2  | 1  | 1  | 6  | 14 | 5  | 32  | 1  | 157  |
| 不明             | 3  | 4  | 3  | 5  | 3  | 1  | —  | —  | —  | — | —  | —  | 3  | —  | —  | 4  | 1  | 1  | 3  | 3  | 7  | 14  | 3  | 58   |
| 計              | 34 | 41 | 63 | 76 | 35 | 65 | 70 | 21 | 43 | 8 | 22 | 14 | 33 | 55 | 42 | 52 | 21 | 29 | 54 | 97 | 89 | 130 | 52 | 1146 |

4) 平面の動向

過去 8 年の間に平面を変化させた農家は、D<sub>2</sub>・C・H・B型で、変化した結果はD<sub>2</sub>・B(B<sub>0</sub>)・B'(B'<sub>0</sub>)・他である。変化以前は、一列型D<sub>2</sub>が1/5・二列型Bが1/3強であったが、変化後は一列型D<sub>2</sub>が1.2割、二列型Bが1/3、同B'が1/6である。これらを加えると7割になり、全体の中のB・D比率8割より下がるので、これらの型から別な型に移った住宅が1割近く(12戸)あることになる。

8年内改築農家の前後の平面変化

| 改築後<br>改築前     | H | A  | B  | B' | C | D <sub>1</sub> | D <sub>2</sub> | D <sub>3</sub> | N | E  | 不  | (計) |
|----------------|---|----|----|----|---|----------------|----------------|----------------|---|----|----|-----|
| H              |   |    | 3  |    |   |                |                |                |   |    |    | 3   |
| A              |   | 1  | 5  | 5  |   |                |                |                |   | 3  | 2  | 16  |
| B              |   | 9  | 16 | 12 | 1 |                | 1              | 1              |   | 10 | 6  | 56  |
| B'             |   |    |    | 1  |   |                |                |                |   |    |    | 1   |
| C              |   | 4  |    |    | 1 |                | 1              |                | 1 | 1  |    | 8   |
| D <sub>1</sub> |   |    | 1  |    |   |                | 3              |                |   | 1  | 1  | 6   |
| D <sub>2</sub> |   | 2  | 14 | 2  |   |                | 8              | 4              |   | 3  | 3  | 36  |
| D <sub>3</sub> |   | 1  | 1  |    |   |                |                |                |   | 1  |    | 3   |
| N              |   |    | 2  |    |   |                | 1              |                |   |    | 1  | 4   |
| E              |   |    |    | 1  | 1 |                |                |                |   | 3  |    | 5   |
| 不              |   | 1  | 4  | 3  |   |                | 5              |                |   |    | 8  | 21  |
| (計)            |   | 14 | 50 | 24 | 3 |                | 19             | 5              | 1 | 22 | 21 | 159 |

(注) 不：不明

8年内改築農家の前後の平面変化

| 今<br>元  | 二列<br>(H・A・B・B') | 二<br>一<br>(C) | 一列<br>(D <sub>1</sub> ・D <sub>2</sub> ・D <sub>3</sub> ) | 他<br>(N・E・不明) | 計   |
|---|------------------|---------------|---|---------------|-----|
| (H・A・B・B')  | 52               | 1             | 2   | 21            | 76  |
| 二一(C)   | 4                | 1             | 1   | 2             | 8   |
| 一列(D <sub>1</sub> ・D <sub>2</sub> ・D <sub>3</sub> ) | 21               |               | 15  | 9             | 45  |
| 他(N・E・不明)   | 11               | 1             | 6   | 12            | 30  |
| 計   | 88               | 3             | 24  | 44            | 159 |

i H型の動向

H→Hは皆無であり、3戸すべてがH→Bとなった。

ii A型の動向

A→Aは16戸中1戸しかない。A→B・A→B'に夫々5戸、分類不能の→Eに3、→不明が2である。この二つ併せて5であるから、AはB・B'・E不明に1/3づつに分れたと見てよい。

iii B型の動向

B→Bは56戸中16戸。B→Aとなったのが9戸、

B→B'になったのが12戸、B→Eが10戸不明が6戸で、やはりB・B'・E不明に等分ではないが3分されている。少数、→D<sub>1</sub>→D<sub>2</sub>他→Cになったものもある。

B'は、以前の型には、1戸しかなかった。

IV C型の動向

C→Cと言うのは8戸中1戸しかない。半数の4戸が→Bになった。→Eが1、他に→Dになったのが1、都市住宅型の→N型が1である。

V D型の動向

D<sub>1</sub>→D<sub>1</sub>は一戸もない。D<sub>1</sub>→D<sub>2</sub>になったものが、6戸中の半分、あとは→B、1→E1、不明1である。D<sub>1</sub>(一列1室)は最低の貧しい住宅であるが、この人達は今も1室の住宅に住もうとしない。しかし、もともと貧しかったこの層の人達は、上れたとしても二室の住宅しか持てなかったのである。

D<sub>2</sub>は、D<sub>2</sub>→D<sub>2</sub>は36戸中8戸、D<sub>2</sub>→Bが一番多く14戸、D<sub>2</sub>→D<sub>3</sub>が4戸、→Aと→B'が2戸づつで、→E、→不明が各3戸である。これによってD<sub>2</sub>の人は、Bを志向していることが分かる。

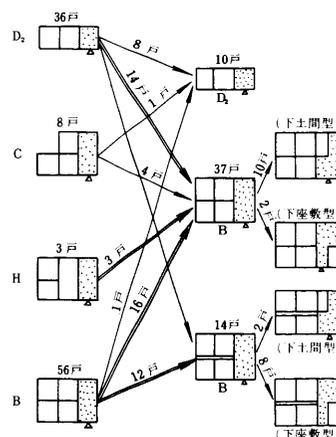
D<sub>3</sub>は、D<sub>3</sub>→D<sub>3</sub>は1戸もなく、→B1、→A1、→E1となって、二列型への上昇を示している。

VI N型等の動向

都市極小住宅型のNはどうなるか。N→Nは皆無。→B2、→D<sub>2</sub>1、→不明1である。逆に→NはC→N1戸しかない。このような型が農村で望まれていないことが分かる。

E型、E→Eが5戸中3戸、→B'1、→C1である。E→Eが多いのが注目すべき点である。

不明は、不明→不明が21戸中8戸、→D<sub>2</sub>が5戸、→Bが4戸、→B'が3戸、→Aが1戸である。D<sub>2</sub>とBに変わっているのが見える。



5) まとめ

平面の動向を特徴的に記述すると次のようになる。

i 全体の中での二列型系の比率は高まっている。

全体159戸中二列系には76→88に、

逆に一列系は 45 → 24

その他の系列は 30 → 44

となり、一列系が減ったが、それは直線的に都市型の住宅平面型系列（N・E・不明）になるとは限らず、多くが農村型の二列型系列になった。

二→二は元二列系の略  $\frac{3}{4}$  が

一→二は元一列系の略  $\frac{1}{2}$  が

他→二は元他系列の略  $\frac{1}{3}$  が

変化した。

ii 全体の中で一列型系の比率は落ちている。

数値は i で示したから繰り返さないが、

一→一は元一列系の略  $\frac{1}{3}$  が

二→一は元二列系の略 3% 弱が

他→一は元他系列の略  $\frac{1}{5}$  が

変って来ている。

iii その他の型は増えている

N は都市型極小住宅であり、E は分類不能ながら在来の農村住宅の型ではなさそうである。この系列は、さすがに増えている。

二→他は元二列系の略  $\frac{1}{3}$  が

一→他は元一列系の略  $\frac{1}{5}$  が

他→他は元他列系の略  $\frac{2}{5}$  が

変っている。

この系列は、全体 1,146 戸の資料で見ると、開発が進み都市的生活者に変化した人を多く含む集落に多く見られ、農業者の住宅または農村住宅とは考えられないものである。しかし、この辺の問題は今後新改築の研究を進める中で、より詳しくより精緻に究めて行く必要がある。

iv 二列系の中では、H・A は皆無になるか減少し、B 系が増えた。

→H は 3 → 0

→A は 16 → 14

→B 系は 57 → 74

になった。

v B 系の中では、B' が増え、その両者のうち B<sub>0</sub>・B'<sub>0</sub> の形をとるものがあらわれた。

→B は 56 → 50

→B' は 1 → 24

B<sub>0</sub> は B のうち土間のところに一室をもつもの、B'<sub>0</sub> も同様 B' のうす土間に一室を持つものである。採り得た資料の限りでは、

B<sub>0</sub>/B は  $\frac{2}{37}$

B'<sub>0</sub>/B' は  $\frac{8}{14}$

である。分母は、分子の数を含む全体である。

B'<sub>0</sub> は B' の中ではその数が極度に多い。農村の住宅が向いている方向の一つが、この土間に一間ついた中廊下四つ間型と言う形にあらわれていると見ることもできよう。

vi 一列系の多くが二列系になり、或る程度の数が他系列になった。

一列系の行先が大事であるが、多くが二列系それも B になった。

vii その他の系列は、二列系・一列系・その他に三分された。

他→二が元他系列の略  $\frac{1}{3}$

他→一が元他系列の略  $\frac{1}{5}$

他→他が元他系列の略  $\frac{2}{5}$

である。

→他は、二列系から一番多くなっており、この層の生活の変化を示している。この内容については、今後つめて行かねばならない。

viii 総じて、→B 型系へ、それも B' 型へ、それも B'<sub>0</sub> 型への方向を辿っていると見るができる。

(注) 本章作成に関しては、神戸信俊君(千葉大学小泉研究室研究生)

の協力を得た。

## 2章 農村における社会生活と農家の間取り

### 一 接客の変遷と自我空間の拡大 一

問題：接客の移り変りに伴って、自我空間の拡大の条件は生まれたか

#### 1. はじめに

農家では、自我生活、接客生活、生産生活、家事生活を充たす屋敷と母屋、付属舎が必要である。中でも多くが「四つ間取り」平面で構成されている母屋には、この4つの生活が入り込み、互いにぶつかり合い重なり合っている。この中で本稿は、「接客」の間取りに与えている規制力は極めて大きいと思われるので、「農家における接客生活をみる」ことにする。

本稿の目的は「接客方式の変化はある方向に向って段階的に進んでいる」ことを明らかにし、それに伴い「自我生活の拡大が生じている」ことを検証することにある。

#### 2. 調査対象地及び方法

調査対象地は、茨城県八郷町の菖蒲沢、上林、蒲須、上青柳、下青柳、中戸向坪、太田第一、太田第二、柴内の9集落である。

方法は、「四つ間取り」住宅に住む老人、主人、子供の三代の結婚式、葬式、正月、盆、コイノボリ、ヒナマツリと就寝について 65 戸 137 人に面接ヒアリング法によ

り記録して、その変遷をみた。

### 3. 調査概要

本稿では、青柳地区の14戸を抽出し、老人の子供時代の階層区分により、地主1戸、地主自作2戸、自作のみ2戸、自小作1戸、小作1戸の計7戸について整理し、人生においてまたイエにとって最大の儀式である“結婚式”と、年中行事の中で一番新たまった“正月”を取り上げ、またそれにより一番圧迫を大きく受けていたと思われる“就寝”を対峙させて検討した。極めて小数の精密調査報告になっているが、八郷町全体のバランスはくずれないように配慮しまとめているつもりである。

### 4. 接客生活の概要

まず、結婚式、正月、就寝の分析に入る前に、接客生活とはいかなるものであるか、また接客の最近の傾向はどうか、などについて概略的にまとめておきたい。

1) 接客は、結婚式・葬式・正月、盆、コイノボリ、ヒナ祭り、法事、米寿・喜寿の祝いなどの行事的なものがあり、これに付随して、都会に働きに出ている兄弟や息子や遠来の客などの宿泊がある。この他にも、ユイとか手間替え、多種の見舞いや贈答、講や寄合いの宿の提供と相応のもてなしなどの「ムラ付き合い」及び各種の「ムラづとめ」に伴う接客がある。

2) 接客は、住宅の色々な室（舞台）と道具を使って、様々な人（演劇者）が時間の中で動きまわることによって生起し消滅する“流れ”であり、繰返す。この過程を通じて“流れ”を支えるイエ、ムラが調整され統一されるが、一方でそれは除々に変化し、これにつれてまた再び調整、再統一が起る。

3) 最近では、家に多人数が集まるということは少なくなっている。しかし(1)に掲げた“接客”は個またはイエが地域社会の中に組み込まれ生きていく上では欠くことの出来ないものである。従って、接客用空間；特に「続き間」または「客間」をどう取るかは、置かれた地域社会の中で個及びイエがどのように存続することを望んでいるかを指し示すものといえる。

4) 接客という演劇の舞台と例えられる住宅の間取りは、接客生活の流れに対応して形成された面が強い。接客生活の方式には地域的、階層的、時代的の差があり、それに応じて接客用のしつらえや間取りにも差が生じている。

5) 一般的に、最近では冠婚葬祭行事や宗教的な会合、部落運営及び事業のための会合、生産のための会合などの

場は、住宅外に地域施設として整備が進み、利用されるようになってきている。下青柳地区には昭和46年8月に「田園都市センター」が完成し、車で30分位でいける筑波山麓に園民宿舎「つくばね」が出来、この他にも新旧多種多様の公共的、私企業的サービス施設の整備が進み、利用がされるようになってきている。

6) 接客を見る上で、個、イエ、ムラの人々に対する、“処遇”の仕方の変化がどうなっているかを見るのが重要である。以前はイエ、またはムラの人々の相互扶助的な形によるサービスが行なわれていたが、最近では、そのような形態は不可能となり、社会的サービスの需要が拡大してきている。人を格づけしサービスに差を設けて偶する形はイエ、ムラの統一と調整のために現在も無意識的に行なわれているが、全体にその差は縮まり、“平等に偶する”形へと変化してきている。このためにも、社会的サービスが求められ、最近では、これが商業的に扱われるようになり、ますます金のかかる華美なものへと変わってきている。

7) しかし、結婚であれば“結納”、葬式であれば“通夜”、選挙など事前の根回し工作の必要な場合の“下打合せ”など個人住宅は依然として“接客”に使われている。むしろ、地域社会施設が活発に利用されるようになればなる程、全体に上位、下位の調整と統一のための接触は多く持たれるようになり、住宅における接客空間も良く利用され、住宅に接客空間が全くなくても済むようにはならない。

8) 仕事関係の用件を聞き処理する場として、土間を間仕切った「応接間」を設ける例は多くなっている。“人寄せ”のための「続き間」は、宿泊客用には現在も良く使われているようだが、今後も適した接客空間であるかどうか検討の余地はあろう。しかし、未だ捨てられ転換する兆しは見えていない、むしろ、どの家でも立派な「続き間」を造るようになってきているとさえいえる。

9) これに関連して問題になることは、他の生活特に自我生活の発展に伴う「個室要求」などとの衝突がある。

八郷では、これに対し、納屋が改造され、隠居（屋）が建てられ、最近二階建て住宅が増え寝室数の確保は進んでいるが、現在も母屋一階の平面は「四つ間取り」が主流である。以前のように表側「続き間」を開けておくという家は少くなり、寝室として利用している例は多くなっているが、接客生活と自我生活とは両立しない矛盾があり、同一空間の併用には限界がある。

## 5. 調査結果

### 1) 間取り

図1は青柳で採集した間取りの中から、7例、現在孫のいる人の子供時代の地主・小作関係順に並べ示したものである。三代の生活を見る目的で間取りを採集しているので、古いやや大きめの住宅となっている。

この10年間に台所土間は大きく増改装が行なわれて、原型を留めない程になっているが、四つ間取り部分は以前のままの住宅が多い。尚、最近の新築住宅一階は田の字型か中廊下型平面であるが、二階に子供または核家族用の部屋を取っている例が多い。

自作・自小作層など以前あまり大きな住宅を持てなかった層に、戦後隠居(屋)が独立して建てられ規模拡大が行なわれている。新築住宅は132m<sup>2</sup>(40坪)前後のものとなっているようである。

戦前に建てられた住宅の接客用のしつらえにはかなり大きな差がみられる。つまり、地主層の住宅には、書院客間が続き間の他にあり、そこには床の間や飾り棚が設けられ、長押が付けられ、小壁に額などが掛けられている。しかし、自作以下の層の住宅では続き間はあっても、接客用に特別なしつらえは施されてなく、普通の部屋の造りの場合が多い。最近の新築住宅では、立派な玄関が造られ、床の間付きの続き間を持ったものが多くなっている。

### 2) 結婚式

表1は結婚式について、三区分した階層別の三代にわたる“貰い方”の入家式から披露宴までの儀式、宴会、サービスについて、その動線と空間などを図示し、一覧表化したものである。この結果をふまえて以下、八郷町の結婚の儀式の意味とその変遷を探ってみたい。

結婚は大きく“見合い”と“変愛”とに分けられる。その出発は“年頃の男女がいる”ことから始まるが、それには個、イエ、ムラ模様が複雑に描かれ、破綻し、または成就する。

成就した場合には、“くれ方”では当日午前中に“お別れの儀式”を親類一同が集まって取り行なう。これにより、娘を相手方へ手渡すことが一族間で同意したこととなる。

これが済むと迎えの(婿)、仲人、正客と一緒に嫁方の仲人、気付、正客等が“嫁入り行列”と唱してムラ人の見ている街道を歩き、家に着くと、庭に集まっている衆目の前で“チョウチン取り換え(入家式)”を行ない縁側または玄関から入る。これにより、どこそこの家に嫁入りがあったことがムラ中に知れ渡り、そしてその嫁はムラの一員として受け入れられることとなる。

家に上るとまず控えの間で“落ち付きのモチまたはウ

ドン”を食べ、次に嫁・婿、仲人(2人)、気付で“三々九度”，八郷では同時に“コイの腹合せ”の儀式が行なわれる。これは嫁・婿の結婚の合意を確かめ、一生互いに、共に生活することを誓う“固め”の意味を持っている。

これが終わると、婿方の親類縁者の前で気付が「お渡し致します。」正客(親類代表)が「確におあずかり致します。」と“挨拶”し、嫁の引き渡しが完了する。

この“経過報告”を仲人がムラ人及び地元有力者など招待客の坐っている披露宴の席上でし、嫁が挨拶に顔を出すことで、両性の結合、イエの結合、地域社会の承認のための“儀式”が完了する。そして、お祝いの酒宴が翌日の昼過ぎまで行なわれる。翌日は、この席に招かれなかった近所の人や友人等が“嫁見”または“お祝い”にかけつけ、また夜中までその人達によって酒宴が続く。この1・2日目は“男の宴会”であるが、3日目はこの酒宴の準備や後仕末など手伝いをしてくれた近所及び親類の“女の宴会”がその労をねぎわり意味と新しい仲間が増えたことを祝い意味で行なわれる。これでやっと全段階毎の全階層に対する“結婚”の承認が終ったことになる。

このようなやり方を、上層部では、豪華に盛大にやり、下層部では、内輪で形だけで行なっていた。

青柳地区では昭和46年8月に田園都市センターが完成し、筑波山麓に国民宿舎“つくばね”が出来て、いわゆる“式場結婚式”または“△△君と○○さんを祝う会”に変ってきている。このような新しいやり方での参加者は、嫁方、婿方両家の近親者と主な親類縁者、ムラの人、組の人、地元有力者、友人の他に、会社の上司や同僚などが構成メンバーとなり、後者が上席、前者が末席に坐り、以前と逆になっているようである。また、その人数は60~70人でやや少なめであるが、同時に同一会場に集まり、半日程度でサッと引き上げてしまう形になったため、主催者側も招待者側も時間的には楽になったといえる。これは兼業化が進み、普段も皆が忙しくなったことと無関係ではないであろう。この他にも、裏方のサービスを一切施設側で行なうようになり、また控室などの家の部屋の整理などやり繰りが不要となり、着付けなども貸衣裳及び専属の気付けに頼めるなどで手間が省け、全般に楽になったといえる。しかし、料理や引物なども豪勢になり、全てに“金”が必要な形になってしまい、大変さは昔以上になっている面もある。戦前は形ばかりの極めて質素なものも下層部には多くあったと思われるが、最近では誰もが“金”をかけ派手に行なうようになってきている。“新婚旅行”も最近ではほとんどの人が出かけるようになってきている。



表1 結婚式

|               | 1代目 祖父母の場合 (明治末~戦前)   | 2代目 父母の場合 (戦前~戦後)   | 3代目 子供の場合 (戦後)   |
|---------------|---|---|--|
| 地主・地主自作・自作地主層 | <p>No.1 昭和6年10月 (地主)</p> <p>★[大正9年1月9日]<br/>           ・腹合せにはコイを使用<br/>           ・村の人40人<br/>           親 17~18人<br/>           女の人 10~15人<br/>           計 67~73人<br/>           15・ほぼ同じやり方</p>                               | <p>No.2 昭和24年3月 (地主・自作)</p> <p>No.2 昭和49年 (自作地主)<br/>           ・土浦の式場で近親者が50人位 集まり神前結婚式を挙げた<br/>           ・実家で嫁は「挨拶」して新しい家へ行った</p>  |  |
| 自作のみ層         | <p>No.4 昭和44年12月 (自作のみ)</p> <p>★[昭和21年]<br/>           ・長男と結婚し、逆縁したので迎いはなかった。<br/>           ・「奥座敷」の西側正面に嫁婚、その西側に仲人が並び、こちらの親戚と村の人が少数集まって(終戦直後)冷酒を回して飲んだ。<br/>           ・「奥座敷」と「座敷」<br/>           ・「三三九度」は逆式だから近所のカカアがやった。</p> | <p>No.5 昭和36年4月 (自作小作)</p> <p>★[昭和6年12月] 婿取り<br/>           ・「さきの座敷」から入った<br/>           ・ほぼ同様の儀式<br/>           ・宴会50人位</p>  | <p>No.4 昭和40年代 (地主自作)</p>  |
| 自作・小自作・小作層    | <p>No.7 昭和1年3月 (小作)</p> <p>・満25才<br/>           ・自分で家建て(70円)新築した<br/>           ・置いといて嫁に貰ったので式はやらなかった。<br/>           ・仲人(2人)を立て、近所の人4~5軒を呼んで「宜しく」とおひろめしただけ</p>   | <p>No.6 昭和27年頃 (小自作)</p> <p>★[大正13年2月]<br/>           ・嫁入りは午後2時頃<br/>           ・6畳の「へや」で三々九度媒酌人(男2人), 気付嫁・婿・男女児の計7人<br/>           ・近づきの挨拶 親類(内の者は出ない)<br/>           ・宴会——晩方まで 近所・組の人20人位 「奥の間」と「中座敷」嫁・婿は並ばない<br/>           ・料理番魚屋1人の他、近所の人手伝った<br/>           ・ダンス、長持は「奥の間」に並べた<br/>           ・調理・オカン配膳場所は変化なし</p> | <p>No.7 昭和51年4月 (自作)</p> <p>・石岡の「式場」で行なう予定 保母をしており、石岡の方の人と決っている。友人などを中心に呼び行なり。「家」でも近所の人に挨拶の席を設ける予定(両親)</p> |

表 2 正月

|               | 1代目 祖父母の子供時代(明治末~大正期)   | 2代目 父母の子供時代(昭和戦前~戦後)  | 3代目 現在の子供時代(昭和30~40年代)   |
|---------------|---|---|--|
| 地主・地主自作・自作地主層 | <p>No.1 明治末~大正</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しめなわ</li> <li>長屋門</li> <li>大神宮様</li> <li>年神様</li> <li>カマド神</li> <li>井戸神</li> <li>屋敷神</li> <li>おそなえ</li> <li>大神宮様</li> <li>仏様</li> <li>もち搦き</li> <li>1俵半/軒×12軒</li> <li>塩ビキ</li> <li>10~15本</li> <li>入口右脇に吊した</li> <li>門松</li> <li>長屋門の前</li> </ul> <p>★戦後大きく変化した。</p> | <p>No.2 昭和初期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しめかざり</li> <li>台所の入口上</li> <li>大神宮様</li> <li>仏様の前に机を出し</li> <li>品物を置いた</li> </ul> <p>★大正時代</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>親戚の人は「玄関」から入り、「ひろま」で挨拶した。</li> <li>めったに来ない人は「奥の間」へ通した</li> <li>近所の人などは台所の入口から入り、「広間」または「茶の間」で挨拶した。</li> </ul> |  |
| 自作のみ層         | <p>No.5 昭和6年頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しめかざり</li> <li>大神宮様</li> <li>年神様</li> <li>オカマ様</li> <li>井戸の神様</li> <li>おそなえ</li> <li>大神宮様</li> <li>三重ね3つ</li> <li>年神様</li> <li>三重ね1つ</li> </ul> <p>★昭和17~8年頃もほとんど同じ(若主人の話)</p>   | <p>No.4 昭和初期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しめかざり</li> <li>氏神様</li> <li>オカマ様</li> <li>井戸の神様</li> <li>「ざしき」</li> <li>大神宮様</li> <li>おそなえ</li> <li>二つ重ね2組</li> <li>年婚品置場</li> <li>机</li> </ul> <p>★明治時代もほとんど同じで変化は少ない(おじいさんの話)</p>   | <p>No.4 昭和33年頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>しめかざり</li> <li>おそなえ</li> <li>年始品置場</li> <li>おざしきの前に机を出す</li> </ul> |
| 自作・自作・自作層     | <p>No.7 大正時代</p>  | <p>No.6 昭和初期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「中の間」の神棚</li> <li>大神宮様</li> <li>靖国神社</li> <li>おそなえ机</li> <li>下または脇に品を置いた</li> </ul> <p>★昭和初~戦中ほとんど同じ</p> <p>★戦後</p> <p>近い親戚しかやらなくなった</p> <p>★昭和45年から</p> <p>1月2日に組中の人がかを回り順に集まり、新年会を行なっている。会費制で49年は500円だった</p>                                      | <p>No.6 昭和38年頃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>おそなえ机</li> <li>神棚の前</li> <li>下に品などを並べて置いた</li> </ul>               |

表3 就寝(小学5・6年頃)

|               | 1代目 祖父母の子供時代(明治末~大正期)  | 2代目 父母の子供時代(昭和戦前~戦後)  | 3代目 現在の子供時代(昭和30~40年代)   |
|---------------|--|---|--|
| 地主・地主自作・自作地主層 | <p>No.1 明治44年6月生れ</p>  | <p>No.1 昭和8年2月生れ</p>  | <p>No.1 昭和39年12月生れ</p>   |
| 自作のみ層         | <p>No.4 明治25年生れ</p>  | <p>No.4 大正11年1月生れ(小低時代)</p> <p>・小高時代に姉 f1 が嫁に行き<br/>オジ alpha M4 が兵隊に行った<br/>m3 が「勝手」に移り寝だした</p>   | <p>No.4 昭和22年6月生れ(小低時代)</p> <p>・ m1 が高校の時、 f1 が嫁に行った。<br/>その時 f2 は「ざしき」に寝ていた。</p>                                |
| 自作・小自作・小作層    | <p>No.6 明治33年2月生れ</p> <p>この後、更に m0・f3・m7 が生れた<br/>この3人は父母と一緒に寝ていた<br/>他の7人の子供は「奥の間」と<br/>「中座敷」に男女の区別なく寝て<br/>いた。</p> | <p>No.6 大正15年6月生れ</p> <p>・小低時代<br/>昭10年にGMが死亡、それまでは<br/>隠居にGM・GF・alpha M・f1 が寝て<br/>いた。<br/>父母とその他の子供は同じく「中座<br/>敷」に寝ていた<br/>・高等時代<br/>高等に行くようになってから、本人<br/>m1 のみ「へや」6畳に一人で寝だ<br/>した。</p> | <p>No.6 昭和28年3月生れ</p> <p>・中学生の頃オバ alpha F の下は<br/>いなくなった。<br/>・妹 f2 f3 は時たま父母の<br/>「へや」とか隠居部屋な<br/>に寝ることがある。</p> |

### 3) 正月

表2は、三区分した階層別の三代にわたる正月の準備と振舞い、サービスの動線と空間について図示し、一覧表化したものである。

正月行事は、新年を迎え、一年の家内及び一族の安全と商売繁盛、または豊作祈願の目的で一族一統つまり血縁の結集のもとに行なわれていた。特に戦前は、本家分家または、地主小作関係による結集が強くなり、正月行事は本家または地主層を中心に行なわれていたが、戦後は農地開放及び本・分家関係の崩壊に伴い、各家毎に家族中心に行なわれるようになってきている。最近では更にその傾向が進んで、正月といっても特別なしつらえや飾りはあまり行なわれなくなり、従って新たまった気分や感情も薄れ、年始の挨拶も主に親類同志で行なう程度になり、内輪の行事となりつつある。以前のように“儀理を欠けない”という理由で相互に挨拶に出かけ振舞い合うわずらわしさは少なくなったが、これに代って新しく家族、友達などグループで旅行に出かけるとか新年会と唱して美味しいものを食べに行くとかいう形が生まれ、消費性の強い正月に変質してきている。

### 4) 就寝

表3は三代にわたるそれぞれ子供時代の就寝形態を三区分した階層別に図示し一覧表にしたものである。

地主であったNo.1についてみると、一代目の時は、老夫婦が書院の「へや」に寝、若夫婦と子供が「ねま」女中は「女中べや」、下男は表側の「座敷」に寝ていた。二代目になると、下男、女中がいなくなり、老夫婦、若夫婦の寝室は変わっていないが、長男が表の「奥の座敷」に寝るようになった。三代目になると、老夫婦は変わらないが、若夫婦と長男は表の「座敷」へ移り、女の子二人が「奥の座敷」へ寝、裏側の「ねま」は物置化してしまっている。

自作のみであったNo.4についてみると、一代目の時は老夫婦と幼児以上の子供は「へや」、若夫婦と乳児は「納屋」にそれぞれ別れて寝ていた。二代目になると、長男が「座敷」に寝るようになり、オジが「勝手」に寝分散が起こっている。三代目になると、「隠居(屋)」が出来、老夫婦はそちらに寝るようになり、「へや」に若夫婦と乳児、表側の「奥座敷」に姉・弟が寝ていた。自小作であったNo.6についてみると、一代目の時は夫婦と乳児2人が「へや」、その他5人の子供が表側の「中座敷」に寝ていた。二代目になると、「奥の間」に老婆と孫2人、「中座敷」に夫婦と子供5人が寝、全員が表側に就寝するようになってきている。三代目になると、「隠居(屋)」が作られ、老夫婦はそちらに移り、若夫婦は「へや」、子供2人は「中座敷」、曾祖母とオバ、長女(孫)が「奥の間」に寝るようになってきている。

以上の如く、どの層も代毎にまず裏側から表側へ就寝室を拡大していることがわかる。これは小学校5・6年について比較したものであるが、中・高校生時代になるともっと家中の部屋を使い“分散就寝”の傾向が強まっている。これを進めた力は“自我の発展”であり、それを可能にしたのは“接客”が家の奥深くまで入り込むことが少なくなり、住宅外の施設を利用することが多くなったためといえよう。

### 5) まとめ

接客の準備及び後仕末労働の面では、かつては人手によってせねばならぬ“大変だった”のが、家事設備の導入またはサービス業の普及により、その労働の肩替りが可能となり、“楽になって”いる。

接客そのものは制度や慣行の変化に伴い、事ある毎に贈答し、挨拶に出かけ、参列するなど人を“縛る”ことは少なくなり、むしろ、生活の行動範囲が拡大し、選択の必要さえも生じてきているため、ある程度自分の好きなように“自由”に行動して良いように進んでいる。

しかし、全く“縛られず”“自由”に接客がなくなったわけではない。現在はむしろ、以前より“忙しく”付き合わざるを得なくなり、全体的に新しい形の結びつき(生産縁、生活縁)が増えており、それによりまた束縛されるようになってきている。

住宅全体が接客、結婚式などの大勢の人寄せや節句行事、宗教行事に使われることは少なくなっている。また、生産上のいろいろな相談事も圃場が整備され、機械が普及し、各家単位の経営形態に変わったことにより、日常的な細々とした問題で住宅を使うことは少なくなっている。

これらに伴い、かつてせいぜい老夫婦と孫、若夫婦と乳幼児にしか分かれていなかった就寝形態が、大勢の人寄せにはあまり利用されなくなった表側の「続き間」にまで拡大し、老夫婦は「隠居(屋)」、若夫婦は「へや」、子供は「続き間」の如く分散した就寝形態が増加している。これはチョットした用件の客に対しては、土間に新しく「応接間」を設け応待し、家の奥まで客を導くようなことはなくなり、大勢の人寄せの時は葬式・法事等を除くと、地域社会の施設を利用することが最近多くなってきていることと、以下の章で述べるような自我の発展に伴い、限られた四つ間取り平面では「続き間」を接客用に開けておくことが不可能となり、表側まで就寝生活があふれ出してきているものといえよう。尚、今回は三代そろっている比較的建築年数の長いほとんど平屋の四つ間取り住宅を抽出し調査したので、古い住宅の矛盾が露呈し、このような結果が得られたが、最近の二階建て住宅をみると、一階は依然として「四つ間取り」で「続き間」が取られており、二階には核家族の

個室化が進んでいる例が多くみられる。このような平屋から二階建て替りに伴ない、“自我生活の拡大”要求と“接客”要求とか独立して充たされている。これは農村には依然として「続き間」を必要とする強固な基盤があるためであり、この内在力を究明し克服の道を探らない限り、今後もそう簡単に接客を社会化の方向に進めることは困難といえよう。

### 3章 農村における子供の生産生活と農家の間取り

#### 1 三世代における家の生産のうつりかわりと、それへの子供の参加

(生産のうつりかわりによつて、子供たちの自我形成のための条件はどのように拡大されてきたか。)

1) 本稿では、子供の全生活の中における生産と子供の生活との関係を見る。全生活について立てたシューマは次のようである。

i 生活の姿・形・機能をそのようにさせる内在する目に見えない力：

つまり、生活については、生活をそうさせる力

ii ある形が型として定着化される内在力：

つまり、住宅の平面については、形をそうさせる力。

をみてゆくことにする。

そして、その内的一部分として、ここでは、家族の生産生活と、子供の生活との関係を見る。が、それも「三世代における生産のうつりかわりと、それへの子供の参加」という形で見ることによって、子供の生産からの解放、子供独自の世界(生活)の形成、その1つとしての子供の個我の形成、子供の主体的行動である諸生活、中でも創造生活、交友生活の発生を基盤としての①家族関係②空間供与③物質供与について考察する。これを大きく「自我」発展と呼ぶことにする。

2) 1)iをみるために

家族の子供に対する関係(処遇関係=支配関係+援助関係)

① 親権の変化(親の子供の生活への支配度、介入度)

② 親の子に対する扶養のあり方の違い(親の子供の生活に対する待遇度)

① 子供の隷属的存在 --

I 全時間働かず、勉強考慮せず、あととり教育不要

II I・IIの中間

III 全時間働かせず、勉強考慮、あととり考えず、教育必要

② I 空間を与えない、物を与えない、(がまんする)、好きなことはできない。

II I・IIの中間

III 空間を与える、物を与える、自分の好きな事をさせる、創造世界。

3) 1)iiをみるために、

農業の変化と空間の変化をみる。

(主に生産及び家事作業における住宅の使われ方をみる。)

生産が後退したということは、子供が自我生活を行なう場合の「条件」ができるということである。

たとえば、①養蚕がなくなる→個室化→子供の部屋に与えられるような条件がつけられる。

そして、二階が個室化する(続き間、続き棟、2階が個室化する)→拡大家族の中の核家族という形で、家族が分化する条件がつけられるということである。

これは、自由の拡大、民主主義の拡大の条件が「生産の母屋からの後退」によってつけられるということである。

さて、主体からみると、農家住宅は環境であり、それ(環境)をこなせるか否かは主体の問題である。主体がどう強くなるかは、社会との関係で、あるとりうる条件の中での、とりうる道すじが決ってくるわけである。

ここでは、上述の主体の問題というよりも、むしろ、環境としての住宅平面について、生産及び家事作業における平面の使われ方をみることにする。そしてこの平面の使われ方を通して、生産という条件がどの程度、農家平面を占拠してき、今日、後退してきたかをみることによって、子供の自我生活を伸展させる条件がいかに拡大されてきたかを明らかにする。

但し、2階が個室化する場合は、昔のように、年寄りか孫をみるという形がくずれ、親が自分の子供をみるという形で“親の権利=親の自我”が拡大するわけだが、2階2部屋の場合は、一般には、一室が親夫婦、残り一室が子供たちと与えられるため、子供の1人ないしは数人は、下の年寄りと寝るといふことがおこり、核家族化は完遂しない。

#### 2 農業の変化と空間の変化

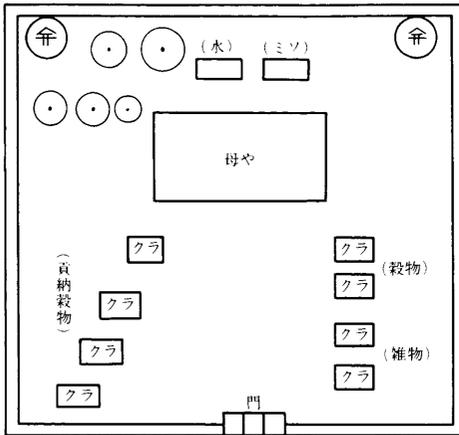
地主制

自作農

⇒ 商業的農業(土地も商品に)→兼農

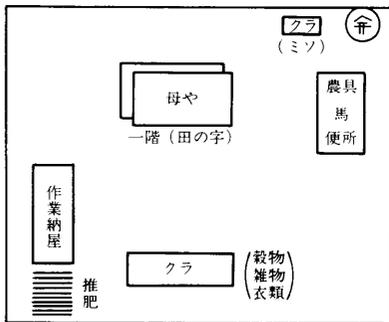
戦前型

• 地主



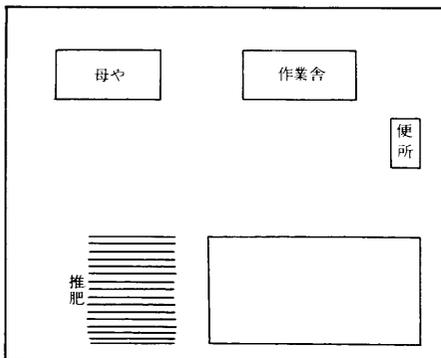
- 生産しない
- 地主制維持の儀式多し、下男・下女あり、子供達には、へやも文化も与える。

• 自作

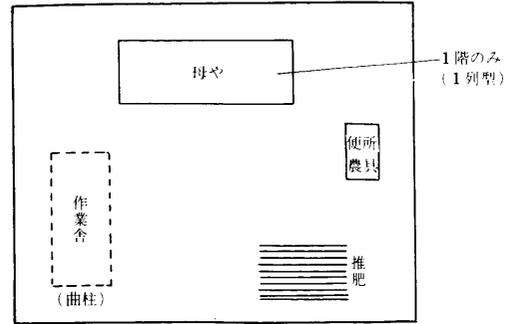


- 田の字、封建時代のイエムラ生活維持の儀式空間
- 子供達にへや、文化、与えられない。
- 養蚕の場合、2階に。

• 小作：上

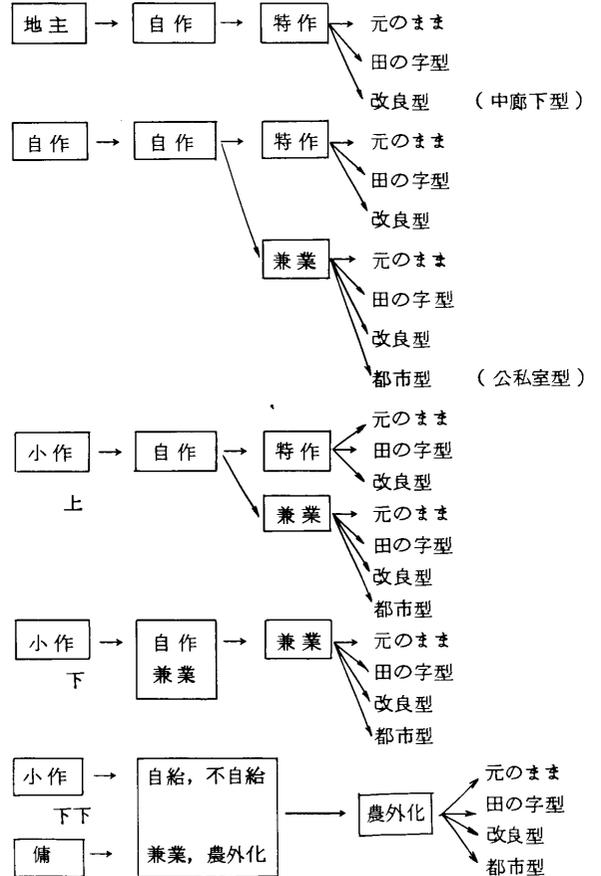


• 小作：下  
備



- 寝るのがやっと
- 儀式、人よせ、ないか少ない。
- 正月人来ず、楽しくない。

現在



3. 調査より

1) 家族の子供に対する関係 (親の子供の生活への支配度、介入度)

① 親権の変化

② 親の子供に対する扶養のあり方の違い

具体的調査項目及び結果の概要

① 子供が家の手伝い

- (i) ふだん 参考 1
- (ii) 朝おきて出かける前 参考 2
- (iii) 養蚕の手伝い 参考 3

・家の手伝いに使われたか否かは、地主・自作・小作の別はみられず、時代的な影響が強い。

|             | 1代目 | 2代目 | 3代目 |
|-------------|-----|-----|-----|
| イ 仕事の手伝いが全て | 5   | 4   | 1   |
| ロ 少しはした     | 5   | 3   | 5   |
| ハ 全く手伝わない   | 1   | 1   | 0   |
| ニ 他         | 0   | 0   | 0   |
| 計           | 11  | 8   | 6   |

② 勉強への考慮、・これも地主・自作・小作別の差はみられない、参考 3

|               | 1代目 | 2代目 | 3代目 |
|---------------|-----|-----|-----|
| イ したくない       | 7   | 5   | 0   |
| ロ 宿題位した       | 3   | 3   | 6   |
| ハ 規則的に決った時間した | 1   | 0   | 0   |
| 計             | 11  | 8   | 6   |

③ 遊びについて、・地主・自作・小作別の違いはみられない。参考 3

|                         | 1代目 | 2代目 | 3代目 |
|-------------------------|-----|-----|-----|
| イ 仕事の手伝が忙がしくて遊ぶ時間がなかった。 | 2   | 0   | 0   |
| ロ 仕事の手伝いのあい間にちょこちょこ遊んだ。 | 4   | 5   | 1   |
| ハ ほとんど毎日何かの遊びをして遊んだ     | 3   | 3   | 2   |
| ニ その他                   | 2   | 0   | 2   |
| 計                       | 11  | 8   | 5   |

2) 農業の変化と空間の変化(生産及び家事作業における住宅の使われ方) 具体的調査項目及び結果の概要

i 農業規模の推移

i) 生産量 ・全般的には、1代目、2代目、3代目別参考 4 では規模が変わらない所、ぐんとふえた所の2つに分けられる。

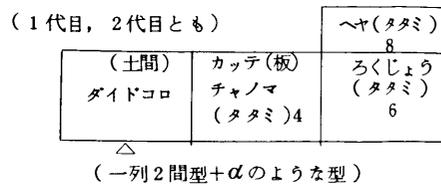
ii) 耕作面積(田・畑) 田、畑の面積は増えている。参考 4

これらを見ると、1代目よりも、2代目の子供たちの方が、生産の手伝いに使われる事が多いのではないかと、予想される。

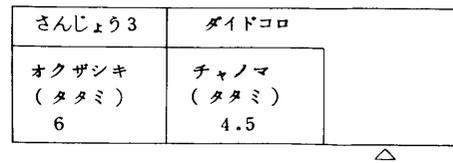
前の報告では、2代目では、小学校低学年よりも、小学校高学年になってから、野良仕事、畑仕事への手伝いが、1代目に比べて増えているという結果が出ている。

ii 農家平面の型

- ・ 1代目、2代目とも田の字が多い、参考 5・6
- E型(当てはまらない型)は小作層にみられる。



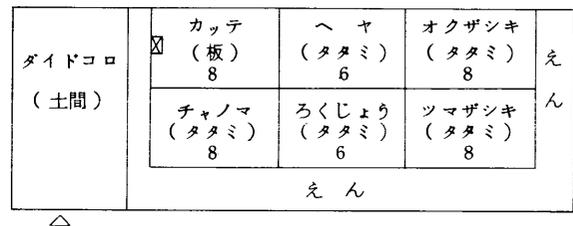
(1代目のみ)



田の字型とヒロマ型の間をいしは  
一列型と、ヒロマ間の間ともみられる

またA型(B+α)は、自作層にみられる。

(1代目、2代目とも)



iii 稲・麦・わら作業 参考 7

稲作業、収納一土間での作業 稲こき、もみすり、米俵込め、米俵積み保管  
 麦作業、" - " 麦こき(ボーチで)、麦粒収納、麦俵込め、麦俵保管  
 わら作業、" - " なわもじり、俵あみ、棧俵あみ、ぞうりあみ  
 他の作業(特に家事作業)収納 みそがまつき(ダイドコロの大釜)みそねかせ、みそだる一タバコの作業葉もぎ、葉のし、葉の選別、切り、そろえる、干す(天井)

- ・マデヤのある層はマデヤで
- ・クラのある層は 米積み保管はクラで行なう。土間は使はない
- ・クラのない層は すぐ買出し人にあづかってもらう。それまで壁際につんでおくだけ。自小作、小作層であり、量は少ないことから、あまり場所はとらないとの事。
- ・1代目から2代目にかけて、土間での作業は全く

なくなるか、或いは減少するか、別空間へ移るかしている。

iv 養蚕時の作業，収納と家族の生活， 参考8， 9

①食事 ②ねる ③子供の勉強

1代目では 食事は動かされる例は少ない（1例のみ立ち食いになる，1例のみ小縁になる所）ねる所が動かされたり，或いは，タナの下にねたりする。  
机は動かされる。（3例）

2代目では 食事は動かされない。  
ねる所が動かされる。  
勉強は，えいきょうされる所は全くない。

3代目では 食事，ねる，勉強は全くえいきょうされない例が1例  
ねる，べんきょうするがえいきょうされるのが1例

計 2例のみ

で，3代目に養蚕をやっている農家は例がきわめて少ない。

4. ま と め

・住宅内での農作業はどのようにかわってきたであろうか

結論的に言えば，住宅内での農作業はへってきた。具体的には，作業がなくなるとか，又は作業は今も行なっているが，住宅内ではなく，別空間へ移ったとかである。

・また，住宅内での家事作業はどうであろうか

これも結論的には，住宅内での家事作業は減ったと言える。それを具体的にみると，作業がなくなって購買化した，作業量が少なくなって，住宅内の場所をとらなくなったなどがあげられる。

・これらの結論からみて，果して子供の自我の空間は拡大する可能性があるだろうか

前にも述べた通り，農作業空間の空室化は，個室化の可能性をもち，子供ばかりでなく，特に両親を含めた核家族化の可能性をはらむかのようにみえる。しかし果して，都会のような核家族を中心とした，居間と個室といった概念でとらえているような公私室型に向かうのだろうか。

・この問題は，ここでとりあげている，農作業及び家事作業空間の減少のみからは結論づけられない

というのは，農村では家と家との関係つまり集落内での位置づけとしての家の存在が大きな位置を占めるので，それがどのようにうつりかわってきたかということ，この次の論文「農村における社会生活と農家の間取り」で明らかにする必要がある。すなわち接客空間は減少しているのか，増大しつつあるのか。その具体的な内容は

何かを明らかにすることが急務である。

5. 参 考 表

1) 仕事の手伝い

| 地主・小作<br>等別 | 一 代 目   |               |         |               |         |              |              | 二 代 目 |   |   |   |   | 三<br>代<br>目 |   |   |
|-------------|---------|---------------|---------|---------------|---------|--------------|--------------|-------|---|---|---|---|-------------|---|---|
|             | ①<br>地主 | ②<br>地主<br>自作 | ③<br>自作 | ④<br>自作<br>のみ | ⑤<br>自作 | ⑥<br>小<br>自作 | ⑦<br>小<br>自作 | 計     | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦           | 計 | 計 |
| イ仕事の手伝いが全て  | —       | —             | 1       | 2             | 1       | —            | 1            | 5     | 0 | 1 | 3 | 0 | —           | 4 | 1 |
| ロ少しはした      | —       | —             | 1       | 0             | 2       | —            | 2            | 5     | 0 | 2 | 1 | 0 | —           | 3 | 5 |
| ハ全然手伝わない。   | —       | —             | 0       | 1             | 0       | —            | 0            | 1     | 0 | 0 | 0 | 1 | —           | 1 | 0 |
| ニ不明         | —       | —             | 0       | 0             | 0       | —            | 0            | 0     | 1 | 0 | 0 | 0 | —           | 0 | 0 |
| 計           | —       | —             | 2       | 3             | 3       | —            | 3            | 11    | 1 | 3 | 4 | 1 | —           | 9 | 6 |

1代目 小・低 草刈り，木の葉サライ，ニワハキ，雑巾かけ

小・高 タキギ取り，ふろたき，ふろ水くみ，馬の世話（カイバ切り，馬のものを煮る，水をのませるなど），ほしもの（ムシロ）をとりこむ，タバコの虫取り手伝い，養蚕手伝い（桑モギ，桑シヨイ，さんぶんを田・畑に運ぶなど）  
子守り

修了後 ほしもの（ムシロ）をとりこむ，畑の草取り，畑の手伝い

2代目 小・低 子守り，おかずを買いにやらされる，畑の手伝

小・高 子守り，雑巾かけ，ふきそうじ，風呂のもしつけ，落葉サライ，馬の世話（カイバ切り），野良仕事，畑に出る，稲こき，草取り，養蚕手伝い（くわつみ，くわとり，くわくれ手伝い，くわもぎ，さんぶん出し）

修了後 子守り，カイバ切り，養蚕手伝い（小・高と同じ），にわたりの世話，野良仕事，畑仕事，

3代目 小・低 戸をしめる，おつかい程度，風呂をもす

小・高 タバコの手伝い（つるす，タバコのなわあみ），雨戸しめ，おつかい，雑巾かけ，庭はき，風呂もし，畑の草取り，  
修了後 落ち葉サライ，風呂をもす，田植え手伝い，雑巾かけ

2) 朝おきて出かける前の仕事

| 地主・小作等別   | 一代目 |   |   |   |   |    |   | 二代目 |   |   |   |   |   |  | 三代目計 |
|-----------|-----|---|---|---|---|----|---|-----|---|---|---|---|---|--|------|
|           | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計  | ③ | ④   | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計 |   |  |      |
| イ した      | 2   | 2 | 3 | - | 1 | 8  | 1 | 2   | 4 | 0 | - | 7 | 0 |  |      |
| ロ 全然しなかった | 0   | 1 | 0 | - | 1 | 2  | 0 | 1   | 0 | 1 | - | 2 | 6 |  |      |
| ハ 不明      | 0   | 0 | 0 | - | 1 | 1  | 0 | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 0 |  |      |
| 計         | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1 | 3   | 4 | 1 | - | 9 | 6 |  |      |

1代目 小・低 ぞうきんかけ, 草刈り,(ひとせ刈る) 木の葉サライ, 庭はき  
 小・高 庭はき, 雑巾かけ, 部屋はき, 草刈り, 木の葉サライ, 子守り  
 修了後 すぐに農業につくので, 手伝い程度ではなく, 本業となる。(朝の畑仕事など)

2代目 小・低 “なし”という人が多い  
 草刈り, カイバ切り, ニワトリに水をやる。  
 小・高 はきそうじ, 雑巾かけ, 子守り, 風呂の水くみ, 草刈り,  
 修了後 草刈り, ごはんたきが若干ある, “全くない”という人もいる。

3代目 小・低 「全くない」という人ばかりである。  
 小・高 「ほとんどない」或いは「全くない」という人ばかりである。  
 修了後 「自分の弁当作りをする」という人一人のみ, 他は「全くない」という人ばかりである。

3) 勉強は

| 地主・小作等別       | 一代目 |   |   |   |   |    |   | 二代目 |   |   |   |   |   |  | 三代目計 |
|---------------|-----|---|---|---|---|----|---|-----|---|---|---|---|---|--|------|
|               | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計  | ③ | ④   | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計 |   |  |      |
| イ したことない      | 2   | 1 | 2 | - | 2 | 7  | 0 | 2   | 2 | 1 | - | 5 | 0 |  |      |
| ロ 宿題ぐらいした     | 0   | 2 | 0 | - | 1 | 3  | 0 | 1   | 2 | 0 | - | 3 | 6 |  |      |
| ハ 規則的に決った時間した | 0   | 0 | 1 | - | 0 | 1  | 0 | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 0 |  |      |
| 不明            | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 0  | 1 | 0   | 0 | 0 | - | 1 | 0 |  |      |
| 計             | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1 | 3   | 4 | 1 | - | 9 | 6 |  |      |

4) 遊びは

| 地主・小作等別                 | 一代目 |   |   |   |   |    |   | 二代目 |   |   |   |   |   |  | 三代目計 |
|-------------------------|-----|---|---|---|---|----|---|-----|---|---|---|---|---|--|------|
|                         | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計  | ③ | ④   | ⑤ | ⑥ | ⑦ | 計 |   |  |      |
| イ 仕事の手伝いが忙がしくて遊ぶ時間がなかった | 1   | 0 | 1 | - | 0 | 2  | 0 | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 0 |  |      |
| ロ 仕事の手伝いの合間にちょくちょく遊んだ   | 0   | 2 | 1 | - | 1 | 4  | 0 | 1   | 4 | 0 | - | 5 | 1 |  |      |
| ハ ほとんど毎日何かの遊びをして遊んだ     | 1   | 0 | 1 | - | 1 | 3  | 1 | 2   | 0 | 1 | - | 4 | 2 |  |      |
| =他                      | 0   | 1 | 0 | - | 1 | 2  | 0 | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 2 |  |      |
| 計                       | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1 | 3   | 4 | 1 | - | 9 | 5 |  |      |

5) 養蚕の手伝い

|     |      | 小・低      | 小・高                                     | 修了後  |
|-----|------|----------|---|--|
| 一代目 | 自作のみ | 大して手伝わない | やったことない                                 | やったことない  |
|     | 自小作  | くわつみ     | くわつみ, くわとり, くわもぎ                        | 不明   |
|     | 小作   | やらない     | くわこぎ                                    | くわつみ, くわとり, くわくれ手伝い, くわこぎ, さんぶん出し, くわくれ, くわきり, くわもぎ, |
|     | 小自作  | やらない     | さんぶん出し, くわきり, くわもぎ (田に運ぶ)               | さんぶく出し (田に運ぶ)  |
| 二代目 | 自小作  | なし       | くわつみ, くわとり, くわくれ手伝い, くわきり, さんぶん出し, くわもぎ | 同 左  |
|     | 自作のみ | なし       | くわつみ, くわとり, くわもぎ                        | なし   |
|     | 自小作  | 不明       | くわつみ, くわくれ手伝い, くわもぎ                     | 同 左  |
| 三代目 | 自作のみ | くわくれ手伝い  | 少しはしたが, 虫をさわるのがきらい                      | 同 左  |
|     | 不明   | くわもぎ     | やらない                                    | やらない   |

6) 生産量の推移

| (米)       |     |     | 一代目      | 二代目 |   |
|-----------|-----|-----|----------|-----|---|
|           | 一代目 | 二代目 |          |     |   |
|           |     |     | 31 ~ 50  | 3   | 1 |
| 10 俵未満    | 1   | 0   | 51 ~ 70  | 3   | 2 |
| 11 ~ 15 俵 | 0   | 0   | 71 ~ 100 | 0   | 2 |
| 16 ~ 20   | 0   | 0   | 101 俵以上  | 0   | 0 |
| 21 ~ 30   | 1   | 1   | 計        | 8   | 6 |

(大麦・小麦)

|           | 一代目 | 二代目 |
|-----------|-----|-----|
| 10 俵未満    | 1   | 0   |
| 11 ~ 15 俵 | 0   | 0   |
| 16 ~ 20   | 0   | 2   |
| 21 ~ 30   | 3   | 0   |
| 31 ~ 50   | 1   | 1   |
| 51 ~ 70   | 1   | 1   |
| 71 ~ 100  | 0   | 1   |
| 101 俵以上   | 0   | 0   |
| 計         | 6   | 5   |



→ A 型 (B+ $\alpha$  型)

E 型 (どの型にもあてはまらないもの)



→ N 型

不明 (どの型になっているか判別できないもの)

## ii 農家平面の型

| 地主・小作等別 | 一代目 |   |   |   |   | 計  | 二代目 |   |   |   |   | 計 | 三代目 |
|---------|-----|---|---|---|---|----|-----|---|---|---|---|---|-----|
|         | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |    | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |   |     |
| B 型     | 2   | 2 | 3 | - | 1 | 8  | 1   | 2 | 3 | 1 | - | 7 | 3*  |
| A 型     | 0   | 1 | 0 | - | 0 | 1  | 0   | 1 | 0 | 0 | - | 1 | 1   |
| E 型     | 0   | 0 | 0 | - | 2 | 2  | 0   | 0 | 1 | 0 | - | 1 | 2   |
| 計       | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1   | 3 | 4 | 1 | - | 9 | 6   |

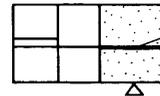
## 7) 耕作面積の推移

(田)

| 地主・小作等別 | 一代目 |   |   |   |   | 計  | 二代目 |   |   |   |   | 計 |
|---------|-----|---|---|---|---|----|-----|---|---|---|---|---|
|         | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |    | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |   |
| 5 反未満   | 0   | 0 | 0 | - | 1 | 1  | 0   | 0 | 1 | 0 | - | 1 |
| ~ 7 反   | 0   | 1 | 0 | - | 1 | 2  | 0   | 0 | 1 | 0 | - | 1 |
| ~ 1 町   | 1   | 1 | 2 | - | 1 | 5  | 1   | 1 | 1 | 0 | - | 3 |
| ~ 1.5 町 | 0   | 0 | 1 | - | 0 | 1  | 0   | 1 | 1 | 1 | - | 3 |
| ~ 2 町   | 1   | 0 | 0 | - | 0 | 1  | 0   | 0 | 0 | 0 | - | 0 |
| 不明      | 0   | 1 | 0 | 0 | 0 | 1  | 0   | 1 | 0 | 0 | - | 1 |
| 計       | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1   | 3 | 4 | 1 | - | 9 |

\* 2 代目の B 型について

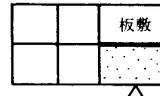
1 例は



戸が土間にのびている。

(東西間仕切りが土間までのびた)

1 例は

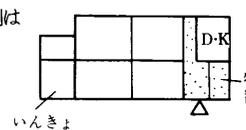


東西間仕切りが土間までのびた。

台所が床上の D.K になった。

B 型について

1 例は



田の字間取りの改造例

いんきよ屋の増加

東西間仕切りの出現(床上の D.K)

(畑)

| 地主・小作等別 | 一代目 |   |   |   |   | 計  | 二代目 |   |   |   |   | 計 |
|---------|-----|---|---|---|---|----|-----|---|---|---|---|---|
|         | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |    | ③   | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |   |
| 5 反未満   | 0   | 0 | 0 | - | 1 | 1  | 0   | 0 | 1 | 0 | - | 1 |
| ~ 7 反   | 0   | 1 | 0 | - | 2 | 3  | 0   | 1 | 1 | 0 | - | 2 |
| ~ 1 町   | 1   | 0 | 2 | - | 0 | 3  | 0   | 0 | 1 | 1 | - | 2 |
| ~ 1.5 町 | 1   | 1 | 1 | - | 0 | 3  | 1   | 0 | 0 | 0 | - | 1 |
| ~ 2 町   | 0   | 0 | 0 | - | 0 | 0  | 0   | 1 | 1 | 0 | - | 2 |
| 不明      | 0   | 1 | 0 | - | 0 | 1  | 0   | 1 | 0 | 0 | - | 1 |
| 計       | 2   | 3 | 3 | - | 3 | 11 | 1   | 3 | 4 | 1 | - | 9 |

## 8) 農家平面の型

### i 平面分類



→ D<sub>1</sub> 型 (一列一間型)



→ D<sub>2</sub> 型 (一列二間型)



→ D<sub>3</sub> 型 (一列三間型)



→ C 型 (D と B の中間型)



→ H 型 (ひろま型)



→ B 型 (田の字型)



→ B 型 (中廊下型)

## 9) 作業・収納の分類

### i 稲作業・収納をみると

稲束の積み込み

稲こき

籾収納

籾すり

米の俵込め作業

米俵積み保管

### ii 麦作業・収納をみると

麦束積み込み

麦こき

麦粒収納

麦の俵込め

麦俵積み保管

### iii わら作業・収納をみると

わら収納

縄ない(手・きかい)又は縄もじり

わらすぐり, わらたたき

俵編み

棧俵編み

蚕網編み

草履編み  
ケダイ編み  
雪靴編み

IV 他の作業・収納をみると（特に家事作業）

味噌ガマ築き  
味噌ねかせ  
味噌樽  
マキワリ  
マキ  
ニワトリ  
ウマ  
ショージュ  
塩  
ウメ  
ソバ  
ナタネ  
漬物

V 養蚕，収納をみると

- 座 ～ 3眼（コバガイ），4令～4眠～（ニワオキ以後）
- 桑 桑置場，桑切場，桑こき場，給桑

- 裏 うらとり場，養蚕出し場，網置場
- 簇 上簇場所

VI 他にタバコの作業収納などがある

葉もぎ，葉のし，葉の収納，タバコのあみをあむ，葉の乾燥，そろえる，切る，選択してワラでコウリに作る（葉わけ）

10) 養蚕時の生活

i 記号 ① 食事

② ねる

GP …… 祖父母又はそのいずれか

P …… 父母又はそのいずれか

C<sub>1</sub> …… 本人

C<sub>2</sub> …… 本人以外の子供たち（兄弟姉妹）

E …… 他（おじ・おば，兄夫婦・傭人など）

③ 勉強

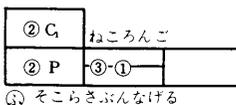
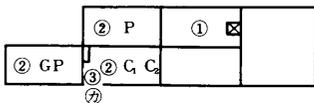
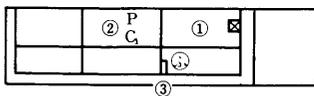
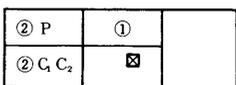
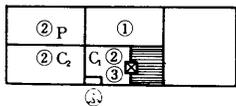
机の位置 …… □

カバン …… ㊦

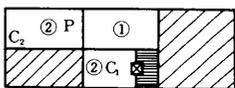
ふろ敷 …… ㊧

ii 1代目では

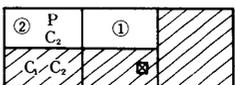
普段の生活（☒イロリ）



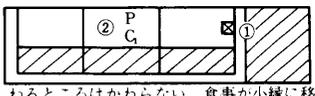
養蚕時の生活（㊦養蚕で使うところ）



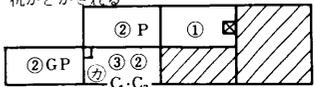
タナの下にねる  
机の移動は不明，おそらくカッテであろう。



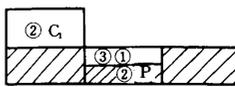
てんでばらばらにねる。タナの下などにもねる。



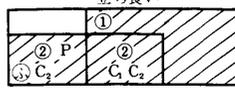
ねるところはわからない。食事が小縁に移る  
机がどかされる



あまりやらなかった。  
ねる，食べる，勉強はえいきょうされない。



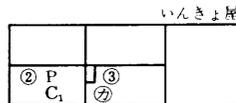
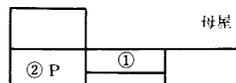
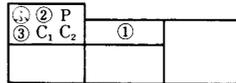
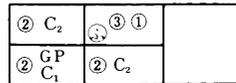
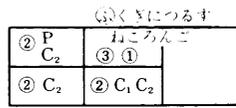
タナの下にねる  
机はない，べんきょうはえいきょうない。



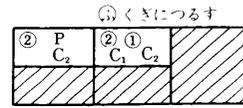
立ち食い  
食事は立ち食いになる。  
タナの下にねる。  
勉強した記憶ない。えいきょうなかった。

iii 2代目では

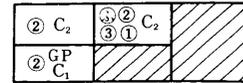
普段の生活 (図イロリ)



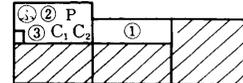
養蚕時の生活 (図イロリ)



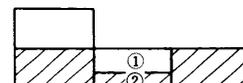
子供たちがカッテでねる  
べんきょうはえいきょうされない



食事はかわりない。女の子がねる所かわる。

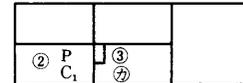


養蚕による①②③はえいきょうなし。

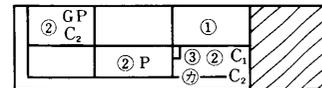
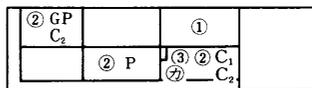


タナの下にねる  
両親のみ、

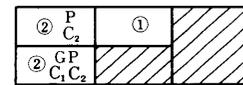
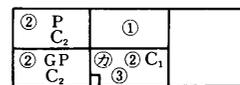
本人はねる・勉強はえいきょうされない



iv 3代目では (2例のみ)



①②③はえいきょうされない



長女がヒロマからオクへうつる  
机がどかされる

4章 農家住宅における子供の自我の生活の発展

はじめに

本稿では、子供の自我生活について追求する。子供の自我生活は、本来、社会の中での家族の自我生活、又家族の中の老夫婦のまたは若夫婦家族の自我生活、若夫婦家族の中の親子の自我生活、等の追求があつて始めてその確立度を知ることが可能であると考えられるが、今回はこのような追求ははじめてであるから子供についての自我生活のみを追求することにする。

農家住宅と都市住宅の大きなちがいは、農家住宅は住宅内に、消費的な家族だけの生活機能以外に生産的機能と社会的機能、言いかえるなら社会的な生活の場としての機能(コミュニティ形成の機能)を有していると言うこ

とであらう。従つて住宅は、家族生活の場であり、生産生活の場であり、社会生活の場である。これら三者は常に相互に矛盾する関係を持ちながら、時代と共に変化して来た。現在その最も大きな変化は、住宅内から生産の場が外に出たことであらう。今回の調査においても戦前にすでに作業の種類により、別棟等に出たものがあるが、養蚕等は、昭和30年代まで、母屋使用の家がある。生産が完全に外に出、母屋が家族生活と社会生活の二側面になったのはごく最近のことである。生産が母屋から外に出るにあつての力は何によるか、ここでは詳しく論ずることは出来ないが、戦前と戦後では大きなちがひがあるであらう。又、社会生活の場がいぜんとして根強く農村住宅の中に存在し、しかも拡大しているのは何の力によるものか。これらを生産と同じように母屋の外に出すことは可能なことなのか。もし可能だとすればそれは何によつて

可能ならしめることが出来るのか、等。住宅における矛盾するこれら諸機能をとりのぞくことにより、家族生活の場が拡大しその中における子供の自我生活も確立度を増すといえよう。しかし、ここでつけ加えておきたいことは、家族生活の場の獲得（空間の獲得）だけでは決して生活はよくなるし、自我生活も確立度を増すとはいえないと言うことである。主体の生活形成に必要な、空間及空間以外の諸条件の獲得の中ではじめて自我はその確立度を増すといえよう。

## 1 研究対象・期間

茨城県新治郡八郷町恋瀬地区（太田・中戸）、小桜地区（柴内）の農家で、現在3世代揃って、しかも3代とも同じ家・屋敷を使用して育った人達を中心とし、原則として3代とも田の字型平面使用である。尚、年齢は12・3才時（小5・6年）とした。調査期間は1976年3月4月、7月である。

## 2 住宅内における子供の自我生活

住宅内における子供の自我生活の追求にあたって、まずその代表的行為である就寝生活について、次に衣類の整理について、次に勉強する行為について、今回は小桜地区I家、恋瀬地区T家・F家のケーススタディを通して述べる。尚、上記の三行為以外に、住宅内における交友、又、音楽や絵画を楽しむとの行為も含めて調査してあるので、次の機会に数量的分析と共に発表したい。

### 1) I家・T家・F家の場合

I家・T家・F家の平面の特徴は、I家は1列型、T家は田の字型、F家は田の字+α（隠居）が加わった型である。又生計基盤については表1に示すとおりである。3代にわたる子供の自我生活の変化については表2・表3・表4に示す通りである。

表1

|    | 1代目   | 2代目   | 3代目    |
|----|-------|-------|--------|
| I家 | 自作    | 自小作   | 自小作    |
| T家 | 自作・地主 | 自作・地主 | 自作+つとめ |
| F家 | 自小作   | 自小作   | 自作     |

### 2) 考察

表2・表3・表4に見られるように、I家、T家、F家の3代にわたる生活は確実に変化し、発展の方向に向いていることがわかる。自我生活についていうなら、①．まだ自我の生活が生れない段階、②．次に自我の生活が生れる段階、③．生れた自我の生活が定着性を持つ段階、④．更に主体を中心に生活諸行為の凝集性を持つ段階、⑤．最後にそれらの形成生活空間の専有化、⑥．

自我の生活のより完成のための諸条件の整備という順に発展すると考えられる。一般に言われるプライバシーの確保の問題は、自我の生活が⑥の段階に至ったものを指していると考えられる。I家・T家・F家の場合を見てみると

### I家の場合

#### <就寝生活>

1代目は家族全部での集中就寝であるが布団が1人1組与えられており、自我の生活は生れている。2代目は家族内での就寝分解は起こるが、その中で自我生活は生れていない。3代目になると、布団が1人1組与えられるようになり自我生活は生れている。I家の場合、子供の自我の生活という視点で就寝生活を見たとき、それらはやっと生れたばかりである。従って自我の生活はまだ定着性を持つ段階には至っていない。しかし、子供の就寝生活という視点でみた時、寝具の与えられ方等は、1代目は、敷布もなければ、夜着るキモノもなく裸で寝ていた段階から、2代目は、敷布はないが下着で寝る。3代目は、敷布も、夜着るキモノもあるというように着実に発展している。

#### <衣類の整理>

1代目 式服のみが家族共有のタンスにしまわれていて、他の衣類（学校に行く時着るキモノ、学校から帰ってから着るキモノ、下着等）はその辺にほおりなげであり、まだ自我の生活は生れていない。2代目になると、鴨居にクギがあり、そのクギは自分のものと決められてあった。自我の生活は生れている。3代目は、良い服だけ家族共有のタンスに入れてあるが、他はその辺にほおりなげであり自我の生活は生れていない。

#### <勉強する>

1代目 勉強はしたことはあるが、特定の場所はなく、その辺にねころんでした。机もなければ本箱もない。学校に行く時は道具を風呂敷につつんで行ったが、帰って来ると、それはその辺にほおりなげておいた。自我の生活は生れていない。2代目 1代目より机が共有で与えられて条件は少しよくなるが、勉強は宿題位をしたと言うが、する時はその辺でねころんでした。肩かけカバンを持って学校に行ったが、帰って来ると机の近くに置いた。自我の生活は生れていない。3代目 2代目より更に条件はよくなる。勉強はしたことはないと言っているが、する場合には、姉と共有ではあるがイス付机を与えられており、自我生活のめばえはある。

以上、I家の場合、就寝生活・衣類の整理・勉強等について見てみると、1代目はこれら三つの生活の自我生

活としての凝集性はない。2代目になると、主体を中心に就寝生活・衣類の整理に関して物の凝集性が現われる。3代目は更に勉強する時の諸道具の凝集性が加わる。しかし、まだ空間の専有化にはほど遠い。

## T 家の場合

### <就寝生活>

1代目 家族が非常に多い。祖母と父のいとこ夫婦それに両親と兄弟8人である。一応、祖母・いとこ夫婦・親子という就寝分解かされているが、親子10人で、幾組か布団をしいて寝ている段階では、とうてい自我の生活は生れない。2代目 は1代目より条件が少しよくなるがまだ自我の生活は生まれない。3代目 になると姉妹で2段ベットを使用し、布団も1人1組与えられており、自我の生活は定着性を持って来る。もちろん寝具の与えられ方等は1代2代3代と代が変わる毎によくなっている。

### <衣類の整理>

1代目 ハレ着のみが家族共有の母親のタンスにしまわれてあり、他はその辺にほおりにかけてある。自我の生活はない。2代目 ふだん着るもの等はかけておく。自分のクギが与えられる。自我の生活が生れる。3代目 子供3人でタンス1竿が与えられ、箱ごとに名前がついていて自我の生活は定着性を持つ。

### <勉強する>

1代目 机は家中で一つあり本箱はない。勉強する時はその辺でねころんでする。自我の生活はない。2代目 1代目より少しよくなる。机は共有であるが勉強する時は机の上です。自我の生活はない。3代目 机はイス付きのものを小学校1年の時から与えられる。本箱も持っている。勉強する時はもちろん机の上です。自我の生活は定着性を持つ。

以上T家の場合、1代目は自我の生活の凝集性は全くない。2代目になると、衣類の整理について自我のめばえはあるがまだ凝集性はない。3代目になると、就寝生活・衣類の整理・勉強する等の自我の生活は定着性を持つと同時に凝集性もはっきりして来る。しかしまだヘヤの専有化への段階には至っていない。

## F 家の場合

### <就寝生活>

1代目 家族は就寝分解しており、布団は1人1組与えられ自我の生活は生れている。2代目 1代目より条件がわるくなり、布団は3人で2組与えられている。自

我の生活は生れていない。3代目 布団は1人1組与えられる。自我の生活が生れ、場所も定着している。寝具の与えられ方は1代、2代、3代と順によくなっている。

### <衣類の整理>

1代目 よそゆきのキモノだけが家族共有のタンスに入れられており、他はクギにかけてある。もちろんクギは自分の場所が決っている。自我の生活は生れている。2代目 クギ(自分の場所決っている。)タンスの箱は共有であるが与えられており、自我の生活は生れている。3代目 妹と共有であるがタンスが与えられており、箱は自分の場所が決っている。自我の生活は定着性を持っている。

### <勉強する>

1代目 まだ自我の生活は生れていないが、机は机がわりの台を共有ではあるが与えられている。2代目 1代目と同じくまだ自我の生活は生れていないが、机を共有で与えられている。3代目机はイス付きのものを本人のものとして与えられている。本箱もある。自我の生活は定着性を持っている。

以上、F家については、1代目は全体として自我の生活のめばえはあるが凝集性は現われていない。2代目になると、就寝生活と勉強の凝集性が現われる。3代目になると、就寝・衣類の整理・勉強と三つの自我生活の凝集性ははっきりしている。しかしまだヘヤの専有化には至っていない。

## 3 まとめ

今回のケーススタディの中では、3代にわたる子供の自我生活は、場所的には定着性を持ち、質的には自己の世界の完成に向って凝集性を持つ段階まで来ているといえる。今回の調査で八郷町の他の家では現在の子供は、子供の自我の生活が形成生活空間専有化の段階に達しているものも多くあり、次の機会にまとめて発表するつもりである。

表 2-1

《就寝生活》

I 家の場合 (小桜地区)

○男 △女

| 代目  | 就寝場所 (日常生活) | 12.3才時の家族構成 | 寝具の状態   | 場所の定着性           |  |  |  |
|-----|-------------|-------------|---|------------------|--|--|--|
|     |             |             |   | 就寝場所 (生産生活による変化) | 就寝場所 (社会生活による変化)   |  |  |
| 1代目 |             |             | <p>明治32年11月25日生</p> <p>女</p> <p>自作</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>田 5反</li> <li>畑 5反</li> </ul> <p>綿入布団を使用。1人で1組の布団を使用敷布はない。夜着にきかえる。・布団は自分で敷く</p>   |                  | <p>○米・麦の保管</p> <p>○米麦作業 (俵積み込み)</p> <p>○糞作業 (俵あみ, 機俵あみ, 蚕網編み, 草履編み, ミノ編み)</p> <p>等母ヤの土間部分で行なう為, 就寝生活への影響はない。</p> |  | <p>泊り客のある時, 又は結婚式や葬式の時 (ナカノザシキ) に親子6人でねる。泊り客は (オク) でねる。</p>                      |
| 2代目 |             |             | <p>大正9年4月10日生</p> <p>男</p> <p>自作</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>田 9反 養蚕</li> <li>畑 6反</li> <li>山 2反</li> <li>原野 5畝</li> <li>借地(田) 2反</li> </ul> <p>綿入布団を使用。部屋いっぱいにして3人でねた。敷布はない。下着だけでねた。・布団は自分で敷く</p>   |                  | <p>1代目の時母ヤの土間部分でしていた作業はマデヤに移る。母ヤ内の作業は養蚕が加わる。コバガイの時 (オク) を使用。その為 (ナカノザシキ) に親子7人でねる。</p>                           |  | <p>泊り客のある時, 又は結婚式や葬式・法事の時は (オク) にねていた両親と弟2人が加わって (ナカノザシキ) にねる。泊り客は (オク) でねる。</p> |
| 3代目 |             |             | <p>昭和23年7月14日生</p> <p>男</p> <p>自作</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>田 8反 養蚕</li> <li>畑 8反</li> <li>山林・原野 2反</li> <li>借地(田) 2反</li> </ul> <p>綿入布団を使用。1人で1組の布団を使用。敷布あり。夜着になる 但し上だけシャツ。布団は自分で敷いたり又敷いてもらう。</p> |                  | <p>母ヤ内での作業は養蚕だけである。コバガイで (オク) を使うため, 親子4人で (ナカノザシキ) にねる。</p>   |  | <p>結婚式・葬式・法事の時 (ナカノザシキ) に移り親子4人でねる。</p>  |

表 2 - 2

I 家 の 場 合

|             | 衣 類 の 整 理 (場 所) | 衣 類 の 種 類 と 衣 類 入 れ   | 洗 濯 ・ 整 理 の 状 態   | 場 所 の 定 着 性               |   |
|-------------|-----------------|---|---|---------------------------|---|
|             |                 |   |   | 生 産 生 活 に よ る 変 化         | 社 会 生 活 に よ る 変 化   |
| 1<br>代<br>目 |                 | <p>①家できていたものはキモノでふだんぎとよんだ</p> <p>②学校に行く時は着がえて行った(キモノ)</p> <p>③夜は上のみを着がえた。名はない。</p> <p>④式の時・正月・盆にはよそぎのキモノをきた</p> <p>4種類のキモノを持っていた。<br/>タンスは家族共有</p>                | <p>①洗濯は自分でした。</p> <p>下着 (冬は1週間に1度きがえる) (夏は毎日ふろに入った時きがえる)</p> <p>ふだん着 (10日に1度きがえる)</p>                         | <p>別になし。</p>              | <p>泊り客のある時、①②③のキモノは移動する。<br/>ナカザシキ</p> <p>結婚式・葬式・法事の時、①②③はもちろん、④を入れるタンスも移動。</p> |
| 2<br>代<br>目 |                 | <p>①家できていたものはツネギとよんでキモノである</p> <p>②学校に行く時は着がえた。(キモノ)</p> <p>③夜ねる時は屋間のキモノをぬぎ下着だけでねた</p> <p>④式の時・盆・正月親類へのおよばれの時、いいきものとハカマをきた。</p> <p>3種類キモノを持っていた。<br/>タンスは家族共有</p> | <p>①洗濯は母か祖母がした。</p> <p>下着(フロに入る時きがえた 夏・2日に1度。 冬・5・6日に1度。)</p> <p>ふだん着 よごせば1~2日に1度きがえる。よごさなければ3~4日に1度きがえる。</p> | <p>養蚕の時④を入れるタンスを移動</p>    | <p>結婚式・葬式・法事の時④を入れるタンス移動。</p> <p>①②③は押入れの中に移動。</p>                              |
| 3<br>代<br>目 |                 | <p>①家できていたもの ヨーフク。</p> <p>②学校に行く時は別のヨーフクに着がえる。(学生服)</p> <p>③夜ねる時は夜着になる。但し上だけシャツ</p> <p>④式服特になし。正月、盆は学生服。</p> <p>3種類持っていた<br/>タンス家族共有である。</p>                      | <p>①洗濯は母がした</p> <p>下着 2・3日に1度きがえる。</p> <p>ふだん着 7日に1度きがえる。</p>   | <p>養蚕の時移動</p> <p>①②③④</p> | <p>結婚式・葬式・法事の時、①②③④移動。</p>  |

表 2 - 3

I 家 の 場 合

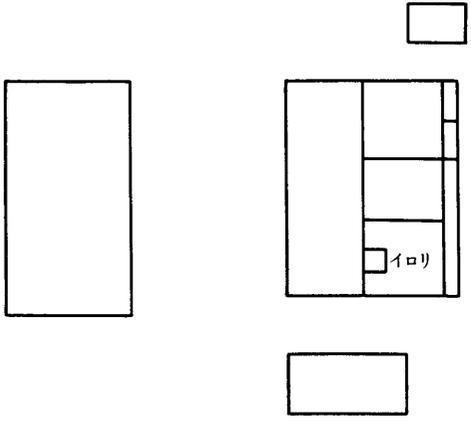
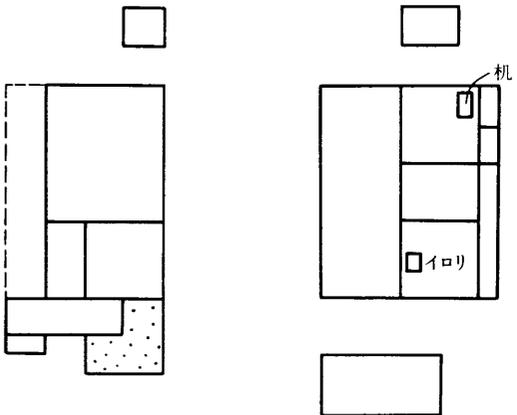
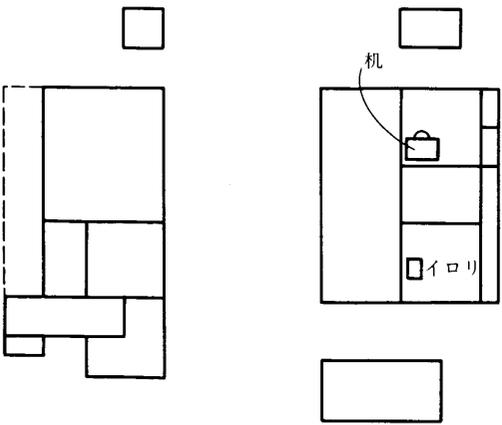
|             | 《勉強する》 場 所  | 道 具   | 場 所 の 定 着 性                            |   |
|-------------|---|---|--|---|
|             |   |   | 生産生活による変化                              | 社会生活による変化   |
| 1<br>代<br>目 |  <p>特定の場所なし<br/>勉強はしたことはあるが<br/>その辺でねころんでした。</p>           | <p>○机はない。<br/>もちろん本箱もない</p> <p>○学校へ行く時はふろしきにつつんで持って行った。</p> <p>○学校から帰るとふろしきはその辺にほおりなげておいた。</p> <p>○明りは手ランプである。</p>  | <p>○めったに勉強をしな<br/>いので別に変化はな<br/>い。</p> | <p>○左に同じ</p>  |
| 2<br>代<br>目 |  <p>特定の場所なし<br/>勉強は宿題位はしたが、<br/>その辺でねころんでした。</p>          | <p>○机は共有で持って<br/>いた。<br/>本箱なし。</p> <p>○学校に行く時は布の<br/>肩かけカバンを持っ<br/>て行った。</p> <p>○カバンは学校から帰<br/>ると机の近くにおい<br/>た。</p> | <p>養蚕の時移動を命ぜら<br/>れる（机とカバン）等</p>       | <p>○その辺で勉強してい<br/>る場合、来客時に移<br/>動を命ぜられる。</p> <p>○結婚式・葬式・法事<br/>等の時は、机・カバ<br/>ンの移動はもちろん<br/>勉強は出来ない。</p> |
| 3<br>代<br>目 |  <p>勉強はしたことない<br/>机はおいてあるが、<br/>へやとして確確保され<br/>ていない。</p> | <p>○机は姉と共有でイス<br/>付机である。</p> <p>○学校へ行く時は肩か<br/>けカバンを持って行<br/>った。</p> <p>○カバンは学校から帰<br/>ると机のわきにおい<br/>た。</p>         | <p>養蚕の時机とカバンの<br/>移動を命ぜられる。</p>        | <p>結婚式・法事・葬式<br/>の時、机とカバンの移<br/>動を命ぜられる。</p>  |

表 3-1

T 家 の 場 合 (恋瀬地区)

就寝生活

○ 女 △ 男

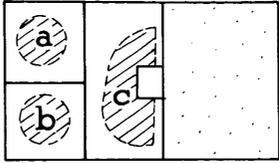
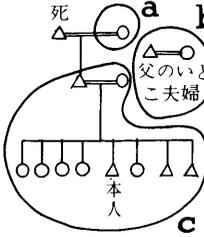
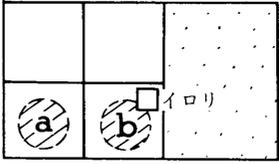
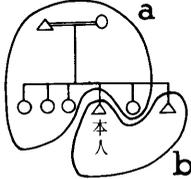
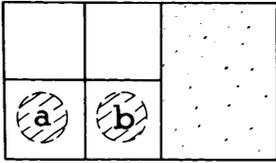
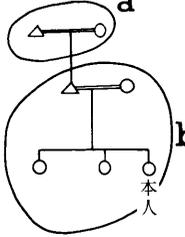
|             | 場 所 (日常)  | 12・3才時の<br>家族構成   | 寝具の状態  | 場 所 の 定 着 性 |                                |
|-------------|---|---|--|-------------|--------------------------------|
|             |   |   |  | 生産生活による変化   | 社会生活による変化                      |
| 1<br>代<br>目 |  <p>明治 38 年 1 月 10 日生 男<br/>生計 自作・地主<br/>                 { 田 4 反 貸地少しあり<br/>                 畑 4 反<br/>                 山 1 町 2 反<br/>                 タバコ (1~2 反)</p>                      |    | 綿布団使用。<br>親子 10 人で幾組かしてねた。<br>敷布なし。<br><br>はだかだねた。<br><br>布団は母親がしいた。         | タバコの時移動     | 来客時・結婚式・葬式・法事等で移動。             |
| 2<br>代<br>目 |  <p>昭和 4 年仕切る</p> <p>昭和 8 年 12 月 18 日生 男<br/>生計 自作・地主<br/>                 { 田 4 反 貸地(少しある)<br/>                 畑 4 反<br/>                 山 1 町 2 反<br/>                 タバコ (1~2 反)</p> |  | 綿布団使用。<br>兄と 2 人で 1 組の布団にねた。<br>敷布なし。<br><br>上着をぬいで下着だけでねた。<br><br>布団は兄がしいた。 | 移動なし        | 来客時・結婚式・葬式・法事の時移動。             |
| 3<br>代<br>目 |  <p>この間仕切りは出入りに使わなくなる</p> <p>昭和 41 年 11 月 15 日生 女<br/>生計 自作<br/>                 { 田 4 反<br/>                 畑 4 反<br/>                 山 1 町 2 反<br/>                 + 父親出かせぎに出ている</p>  |  | 綿布団使用。<br>2 段ベット使用<br>1 人 1 組の布団を使用。<br>敷布あり。<br><br>上着をぬいで下着だけでねる。          | 移動なし        | 来客時・法事移動なし。<br><br>結婚式・葬式の時移動。 |

表 3-2

T 家 の 場 合

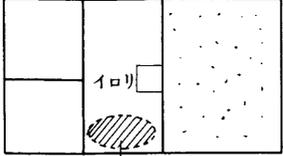
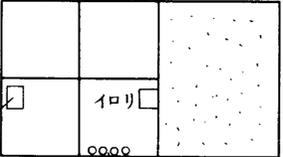
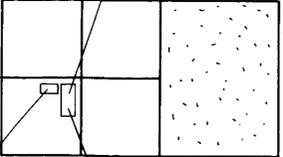
|             | 衣類の整理 (場所)  | 衣類の種類と衣類入れ   | 洗濯・整理は誰れがしたか                  | 場所の定着性    |  |
|-------------|---|--|-------------------------------|-----------|--|
|             |   |  |                               | 生産生活による変化 | 社会生活による変化  |
| 1<br>代<br>目 |  <p>①②③はその辺にほうりなげておいた<br/>ハレ着だけ母親のタンスに入れた</p>  | <p>①学校に行く時のキモノ</p> <p>②学校から帰って家にいてくるキモノ</p> <p>③下着</p> <p>④ハレ着</p> <p>①②③は入れる物なし。</p> <p>④のみ母親のタンスは家族共有</p>        | <p>洗濯：母親</p> <p>整理：母親</p>     | タバコの時移動   | <p>①②③は人が来ればいつでもどかさされた。</p> <p>又、④も結婚式や葬式の時は移動</p> |
| 2<br>代<br>目 |  <p>①大きい入れもの(箱)<br/>③共有</p> <p>②くぎ、さげておいた(くぎには名前がついていた)</p>                                | <p>①学校着</p> <p>②ふだん着</p> <p>③下着</p> <p>①③は共有の箱がありそこに入れてあった。</p>  | <p>洗濯：母親</p> <p>整理：母親</p>     | 別になし      | 結婚式・葬式・法事等人寄せの時移動                                  |
| 3<br>代<br>目 |  <p>タンス、子供3人でタンス1等、箱ごとに名前がかいてある。</p> <p>③衣袋ばこ</p> <p>①②(学校に行く時着ていたものを帰って来てからもきていること多い)</p> | <p>①学校に行く時 ヨーフク</p> <p>②学校から帰ってから着るもの(ヨーフク)</p> <p>③下着</p> <p>④よそゆき</p> <p>①②④タンス(子供3人で共有、箱専有)</p> <p>③衣袋ばこ 共有</p> | <p>洗濯：母 or 祖母</p> <p>整理：母</p> | 別になし      | <p>結婚式・葬式の時移動</p> <p>法事は移動しない。</p>                 |

表 3 - 3

T 家 の 場 合

|             | ≪勉強する≫ 場 所  | 道 具   | 場 所 の 定 着 性        |   |
|-------------|---|---|--------------------|---|
|             |   |   | 生産生活による変化          | 社会生活による変化   |
| 1<br>代<br>目 | <p>机(共有)</p> <p>イロリ</p> <p>特定の場所なし。<br/>勉強する時はその辺で<br/>ねころんでした。</p> | <p>○机は、家中で使うもの一つあった。もちろん本箱などない。</p> <p>○学校へ行く時は、ズックのカバンを持って行った。</p> <p>○カバンは学校から帰るとその辺にほおりなげておいた。</p> | <p>タバコの時は出来ない。</p> | <p>人が来るとどかさされた。<br/>又、結婚式・葬式・法事等でも動かされる。</p>        |
| 2<br>代<br>目 | <p>机(共有)</p> <p>あまり勉強はしないが、<br/>する時は机の上。</p>                        | <p>○机は共有で持っていた。本箱はない。</p> <p>○学校へ行く時はふろしきを持って行った。</p> <p>○学校から帰るとふろしきは机の上においた。</p>                    | <p>別になし</p>        | <p>ちょっとした来客でもどかさされた。<br/>もちろん結婚式・葬式・法事の時は動かされる。</p> |
| 3<br>代<br>目 | <p>机(本人のもの)</p> <p>本箱(本人のもの)</p> <p>勉強はよくする。<br/>机に向ってやる。</p>       | <p>○机はイス付のものを小1の時から与えられる。もちろん本箱ももっている。</p> <p>○学校へ行く時は、ランドセル</p> <p>○ランドセルは学校から帰ると机の上におく。</p>         | <p>別になし</p>        | <p>結婚式と葬式以外には動かされない。</p>                            |

表 4 - 1

F 家 の 場 合 ( 恋 瀬 地 区 )

就寝生活

○女 △男

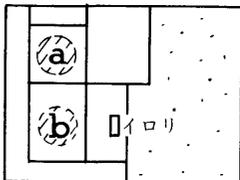
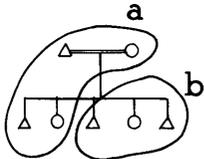
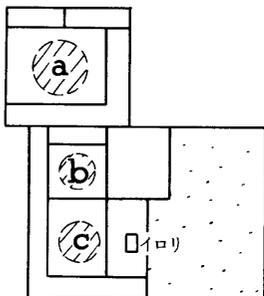
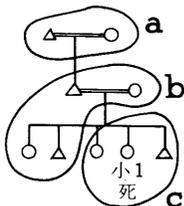
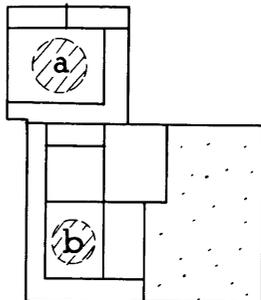
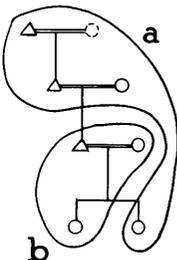
|             | 場 所 ( 日 常 )  | 12・3才時の<br>家 族 構 成  | 寝 具 の 状 態  | 場 所 の 定 着 性       |                                 |
|-------------|--|---|--|-------------------|---------------------------------|
|             |  |   |  | 生 産 生 活 に よ る 変 化 | 社 会 生 活 に よ る 変 化               |
| 1<br>代<br>目 |  <p>明治 38 年 1 月 10 日 生 男<br/>生計 自小作<br/>                 { 田 8 反 ( 借 5 反 )<br/>                 { 畑 5 反 ( 借 2 反 )<br/>                 { タバコ 1 反 5 畝</p>                |    | <ul style="list-style-type: none"> <li>○綿布団を使用</li> <li>○1人で1組の布団を使用</li> <li>○敷布なし</li> <li>○はだかである</li> </ul> <p>布団は自分でしく。</p>                       | 別になし              | とまり客のある時移動。<br><br>結婚式・葬式等の時移動。 |
| 2<br>代<br>目 |  <p>昭和 2 年 4 月 7 日 生 男<br/>生計 自小作<br/>                 { 田 8 反 5 畝 借地 ( 田 2 反 )<br/>                 { 畑 8 反 かいこ 年 120 ㌦<br/>                 { 山 1 町 2 反 タバコ 2 反</p> |  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○綿布団を使用</li> <li>○2組敷いて3人でねた。</li> <li>○敷布はフスマ袋を使用</li> <li>○夜は家で手織りのシマの着物をきてねた。</li> <li>○布団は自分でしく。</li> </ul> | かいこの時移動           | とまり客のある時移動。<br><br>結婚式・葬式の時移動。  |
| 3<br>代<br>目 |  <p>昭和 26 年 10 月 31 日 生 女<br/>生計 自作<br/>                 { 田 6 反<br/>                 { 畑 1 町 1 反 タバコ<br/>                 { 山 3 町 ウシ ( 6 頭 )</p>                     |  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○綿布団を使用</li> <li>○1人で1組の布団を使用</li> <li>○敷布あり</li> <li>○夜はハダシャツの上にゆかた</li> <li>○布団は自分でしく。</li> </ul>             | 別に移動ナシ            | 別に移動ナシ                          |

表 4 - 2

F 家 の 場 合 ( 恋 瀬 地 区 )

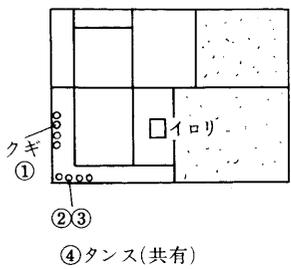
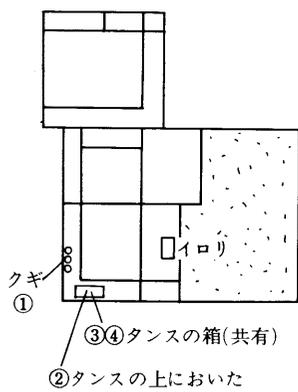
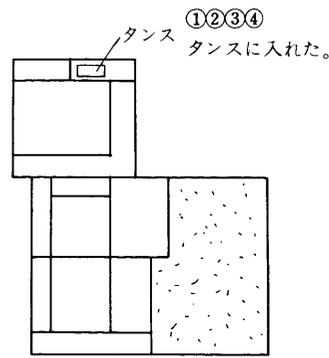
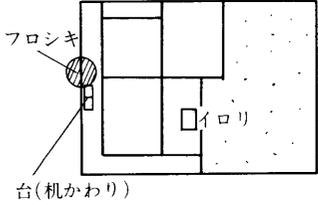
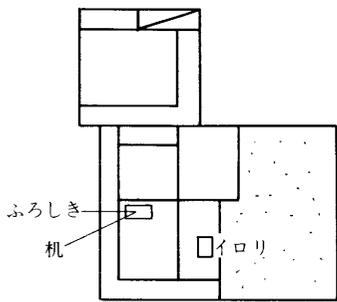
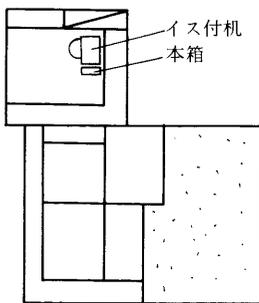
|             | 衣 類 の 整 理 ( 場 所 )  | 衣 類 の 種 類<br>と 衣 類 入 れ  | 洗 濯 ・ 整 理 は<br>誰 れ が し た か    | 場 所 の 定 着 性       |                    |
|-------------|--|---|-------------------------------|-------------------|--------------------|
|             |  |   |                               | 生 産 生 活 に よ る 変 化 | 社 会 生 活 に よ る 変 化  |
| 1<br>代<br>目 |  <p>①のクギ…自分のクギ決っていた<br/>②③のクギ…家族皆一諸</p> | <p>①学校に行くとき<br/>るもの、キモノ</p> <p>②学校から帰って<br/>から着るもの、<br/>ふだんぎ</p> <p>③下着</p> <p>④よそゆき</p> <p>タンス(共有)</p> | <p>洗濯：母親</p> <p>整理：母親</p>     | 別にナン              | 結婚式・葬式・<br>法事等の時移動 |
| 2<br>代<br>目 |  <p>①のクギ…だいたい自分のは決っていた</p>             | <p>①学校着</p> <p>②ふだん着</p> <p>③下着</p> <p>④よそゆき</p> <p>タンス(共有)</p>   | <p>洗濯：母</p> <p>整理：母 or 祖母</p> | かいこの時移動           | 結婚式・葬式・<br>法事等の時移動 |
| 3<br>代<br>目 |                                       | <p>①学校着</p> <p>②ふだん着</p> <p>③下着</p> <p>④よそゆき</p> <p>タンス<br/>(妹と共有)</p>                                  | <p>洗濯：母</p> <p>整理：母</p>       | 別になし              | 別になし               |

表 4 - 2

F 家 の 場 合 ( 恋 瀬 地 区 )

|             | 《勉強する》 場 所   | 道 具  | 場 所 の 定 着 性 |   |
|-------------|--|--|-------------|---|
|             |  |  | 生産生活による変化   | 社会生活による変化                                     |
| 1<br>代<br>目 |  <p>台(机かわり)</p> <p>○台の上でよく勉強はした</p> | <p>○机は持っていなかったが、机がわりの台を持っていた。共有である。本箱はない。</p> <p>○学校に行く時は、ふろしきを持って行った。</p> <p>○学校から帰るとフロシキを台のわきにおいた。</p> | 別にナン        | 結婚式・葬式・法事等の時移動                                |
| 2<br>代<br>目 |  <p>○勉強は机の上でよくした</p>              | <p>○机は共有で持っていた。本箱はない。</p> <p>○学校に行く時は、ふろしきを持って行った。</p> <p>○学校から帰ると風呂敷つつみは机の上においた。</p>                    | かいこの時移動     | <p>結婚式・葬式・法事等の時移動</p> <p>とまり客のある時は勉強できない。</p> |
| 3<br>代<br>目 |  <p>○勉強はよくした<br/>○机に向って</p>       | <p>○机はイス付机を本人のものとして与えられている。本箱もある。</p> <p>○学校に行く時は、カバンである。</p> <p>○カバンは学校から帰ると机のわきに置いた。</p>               | 別になし        | 別になし  |

## 5章 農家の間取りを形成させる力の構造

### 1 空間構造と生活構造

#### 1) 生活空間の構造は生活構造のあらわれ

貝の殻の形は貝の生きて行く構造(生命構造(内)と生活構造(外))のあらわれとして見ることができるが、同様に人間の使用している空間の成り立ちは人間の生きて行く構造(生活構造)のあらわれとして見ることができる。とすれば、<人間の生きている空間：生活空間の構造>は<生活の構造>を探らなければ出て来ないと言うことになる。

#### 2) 生活空間認識で注意しなければならないこと

しかし、<生活空間>と言うと、一般には建物とか工作物とか見えるもので、人間が造ったものを指したり何かを囲んでいるものを指したりするのが一般である。が、私がこれまでに追求して分ったことは、<生活空間>と言うのは何も見えるものばかりではなく、見えないものも含んでおり、見えるものも人が造ったものばかりではなく、自然のものも含んでいると言うことである。身が動くかそれに伴って物が動く空間を一般には<生活空間>と理解し易いことである。これは実は人の<活動空間>または<行動空間>であって、<生活空間>とは言えない。<生活空間>はこれを含み、更に<その他の空間>をもとり入れたもので成り立っている。この空間は<<生活に必要な空間>>乃至<<空間条件>>である。例えば“太陽が出ている空”とか“青空”とか“月とすゝきが見える空間(景色)”等である。式で示せば  
(生活空間) ⊃ (人間が動く空間) ∪ (生活のためにとり入れる空間)  
となる。

更に、人間の生活空間は重層し、大小が包含していると言うことである。住宅が、<家族の生活の場>であるとすれば、へやは<個人の生活の場>や<家族の或る目的のための共同の生活の場>となる。大きな空間の中に小さな空間が入っており、包含関係にある。同様に、住宅は屋敷に含まれている。更に屋敷は集落に含まれている。このようにして、上は国土空間から下は一つの行為空間にいたるまで、何重にもなった包含関係になる空間で構成されていると言うことができる。

次に、一つの空間は一つの生活空間と対応していないと言うことである。或る行為がいくつかの室にまたがる時、すでに空間：生活の対応関係は解消されていると言える。お祝いのときの続きべやの使い方(トッピラキと現地語では言う)やムラ生活や親類とのつき合いを住宅でする場合等の時、このことを見ることできる。

#### 3) 生活の構成要素としての空間

生活空間を分析して行くと、生活を分析して行かねばならないことが分かる。生活は私のこれまでの研究\*によれば、人間も入った物質の連りの運動である。そしてその運動体の構成要素は性質別に分けると次の5要素になる。

(人) (物<sub>1</sub>=対象) (物<sub>2</sub>=手段) (物<sub>3</sub>=空間)  
(物<sub>4</sub>=エネルギー)

これで見ると、空間は<生活体構成物質の一要素>である。一つの運動が終れば生活体は解体されるので、空間は次の生活に備えて整備される。これが掃除やへやの模様替えまたは修理・貼り替え・塗り替え等の形であられる。このように、空間と生活は対応するものではなく、空間を一要素として生活体ができ上っているものなのである。式でかけば

生活 / 空間  
生活体 ⊃ 人 ∪ 対象 ∪ 手段 ∪ 空間 ∪ エネルギー  
生活体 ⇒ 生活空間

#### 4) 生活構造

(人)は生活(人間活動)をして行く中で生命を維持して行く。しかし、生活は生命維持を越えたところまで来ている。生命活動のための人間の動きとそれを越えた人間の活動を併せて<生活>と呼ぶことにしよう。

##### i 目的行為(生活)

この人間活動の中には、生命維持ばかりでなく、次の5段階の目的行為がある。

1. 必須行為(生活) Essentials
2. 必要行為(生活) Necessaries
3. 便益行為(生活) Conveniencies
4. 贅沢行為(生活) Luxuries
5. 有害行為(生活) Injuries

この5段階は、1.これがなければ死ぬとか身体をこわすかするもの(例えば、食べる・眠る等)、2.これがなければ普通の水準が保てないとまわって行かないもの(例えば、学校に行く・勉強机で勉強する等)、3.これがなくても死ぬことはないがあれば便利であるとか、あれば一味抜けて文化的であるとかするもの(例えば、自転車で行けるところを自動車で行くとか物を観察するのに一寸した拡大鏡で見るとか白壁の家に住む等)、4.なくても生きて行けないとか文化的な面が損なわれることなく、明らかにゼイタクと見られるもの(例えば、高価なネックレス・イヤリング・指輪などで盛装してパー

(注) : 左は右に対応する  
/ 左は右に対応するものでない  
⊃ 左は右を包含する  
∪ 左右を集合和する  
⇒ 右は左の要素である

ティを開くとか高級自動車を乗りまわすとか豪華な住宅に住むとか), 5.過ぎたるは及ばざるが如しのたとえの如く, 身体や生活体を破壊するようなもの(例えば, 喫煙や未成年者の飲酒やビニールゾッキのヘヤで勉強したり寝たりすること), これは肥満と同じく生活体への物質供給の失調を示している。従って, 痩せているのも失調の中に入る。住宅の外壁にトタンを貼りつけ内壁にプラスチックボード下地セメント系上塗り(セー壁等)等の家で家族生活を営むなども, この Injuries の中に入れてよいであろう。

ii 目的行為を遂げさせるための行為

子供の頃人間は, 自分で箸は使えないしお便所へ独りで行けないしフロにも独りでは入れない。これらの行為は人手を借りてはじめて可能になる。この人手と言うのは, 自分以外の誰かが活動(生活)することによって得られる。母とか姉とかの人達によってである。家族と言うのは, このような必要によって結成された人間の集団であると考えられるが, これは老人に対しても言うことができる。これを<介助行為>と言ってもよいであろう。

次に, 自然物を直接目的生活の生活体構成要素にとり入れられないため, 自然または社会の中からとって来て加工して目的行為者に提供し目的行為をさせる, その後始末もする, と言う行為がある。この一連の行為を<準備後始末行為>と呼ぶことにする。これも, 人間が家族を結成する大きな要因になる行為である。必要でありながらこの<準備後始末行為>及び<介助行為>をする家族が欠けている人達には, 家族にかわる社会組織をつくり与えなければならない。

最後に, 物質は社会の中を流れているわけであるが, 市場(小売店)から買って来て加工するのが家庭で行なわれる行為とすれば, 物質を自然から社会にとり入れて市場にまで流すのは社会組織の行為と言うことができよう。この社会組織は家庭を基地としている各人によって組織されている。しかし, その見返りとして社会から物資の配分権(賃金・所得)等を, その社会活動の結果から得ているのである。

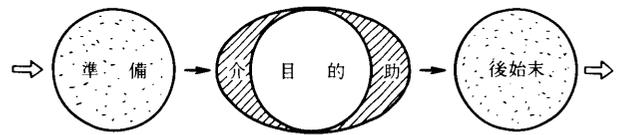
iii 生活の流れの構造:

以上の生活を総括すると, 次のような物質の流れになっている。



上の段が, 社会的組織活動で, 生産・流通と言われているものである。下段は, 一般に家庭で営まれるもので, ひっくり返して<生活>と言っている人が多い。私は, この部分を<生活>と言うことは, 極力避けたいと考えている。<家庭生活>と言うこともできない。家庭のない人もこれと同じ生活をしなければならないのであるから。それで次のように考えるのである。

→ 購入 → 加工 → 及び → 後始末 → を一括して<準備後始末行為>とし, → 使用 → を<目的行為>と<介助行為>に分ける。図にかくなら次のようになるであろう。

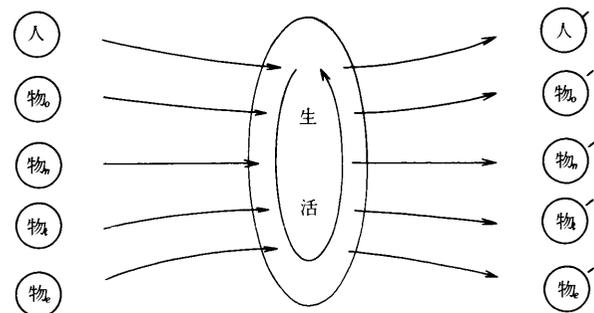


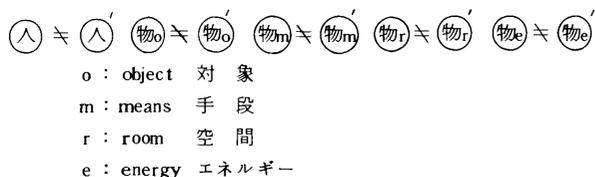
このようになるのは, 生活組織的な分け方をするからで, 経済の分け方と異なる。

iv 生活の流れの構造:

生活を物質の流れとして一応上述のような形で捉えたが, 生活は一要素から成り立っているのではなく, 性質別の5要素から成り立っている。また, 一要素でもその内容は多岐にわたっている。例えば食では食物は対象であるが何種類のもを一度に食する。

この5要素 (人) 対象 手段 空間 エネルギー が結合して活動したとき, 私はそれを<生活>と呼んでいるが, それは生活が終わったあとは解体される。<生活>の中で物質は変化されるから, 生活に投入される前の物質と生活が終わったあとの物質は変っている。例えば, <眼る>前の(人)はくたくたに疲れた人であるが, <眼り>からさめた(人)は疲れがとれさわやかに身体に働くエネルギーがみなぎった人になる。しかし, それに使われるフトンやヘヤは, 前と後では何百分の1または何千分の1すり減って違っているし, 中に湿気を含んだり汚れたり塵がつもったりして, 干したり乾かしたり掃除したり洗濯したりしなければ元の姿にもどらないのである。これを図に画けば次のようになる。





これを基礎にして生活の流れの図を画くと複雑なものになり、iiiで述べたように簡単には行かない。しかし、これをたどると生活の構造の本当の姿が浮かび上がる。この生活をもう少し追求しよう。

或る生活が行なわれるとき、その生活に提供されるのは対象になる物質ばかりではない。手段もあれば、空間もあれば、エネルギーもあり、更に人もあるのである。これらは、その前に提供する生活体があるのである。生産活動に対しては家庭が人の供給体になるし、物<sub>o</sub>も送られて来るもとがあるし、物<sub>m</sub>も買った先がある、修理もそこがやるし、物<sub>r</sub>(土地や建物)も提供元がある。エネルギーも同じである。そして、それが毎日繰り返されることによって、途切れずに生産が流れのように続くのである。このように、生産と言っても物質を消費してはじめて成立する。この場合(人)も元気一杯な人間が消費されてエネルギーのなくなった(人)になるのである。

一方、家庭はこの逆で、疲れ切った(人)が家に帰って<食べ>たり<だんらん>したり<寝>たりして元気を回復し、(人)になる。勿論、前日の(人)とその日の(人)とでは、生命の消費が1日だけ進んでいるが。この回復が行なわれるについても、物<sub>o</sub>物<sub>m</sub>物<sub>r</sub>物<sub>e</sub>の物質の消費があって成立することは、前に述べた。

このように、生産(労働)にしても、回復(家庭)にしても、物資を消費して成り立つが、生産は(物<sub>o</sub>)が(物<sub>o</sub>)になり次の生活体に送られることであり、家庭は(人)が(人)に回復するところが違っている。しかし、一般に<生活>とか<消費生活>とか言われているものは、このような狭い回復だけの意味でない人間行為をも含んでいる。このことについては、目的行為が5段階あることを前に述べたが、回復はこのうちの才1段階 Essentialsの段階のみをさしていると言える。才2段階以上の目的行為も人間の生活の大きな部分であり生きる目的である。従って、生活は生命の再生産活動であるという定義は、部分的にしか当たっていない。人間については、むしろ「生活は生活そのものの再生産」活動と言うべきであろう。

生命再生産のための生活一つとっても、その結合諸物資の供給体を考えるとかなり複雑な図式になるが、才2段階以上の目的行為の前後の行為連関を画くと、それは複雑な図式になる。この物資提供体の中には、民間の機関だけでなく、官庁機構も含まれている。市で音楽会を催すとか、国で運動競技会を催すとかがこの例に入るのであろう。消費は社会空間(家庭・学校・生産・職場以外の意味)で行なわれる。

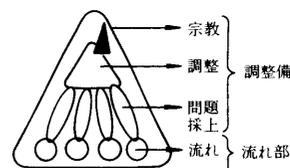
しかし、どれ程複雑になったとしても、生活構成要素の確保・提供、提供された諸要素の結合・運動、その解体と変質した諸要素の排出、排出された諸要素の受け入れ機関と言う単独生活の図式は変らないし、その単独生活が前後に長く続く連鎖であり、ある種の生活にはその生活特有の<連鎖>がある、ことには変わりはない。

## V 生活の流れの調整の機構

生活の連鎖・物質の流れは、或る生活について一通りではない。普通幾通りもあるのである。しかし、この幾通りもの流れのうち或るものを探ろうとするとき、勝手にはできない。全体のバランスの中で一つを選ぶ。逆にその一つを選ぶために、全体を組みかえなければならないことになる。たとえば、<勉強>は廊下でもできるし居間でもできるし、更には兄弟姉妹のヘヤでもできる。自分が勉強ベヤを持っていてそこを使ってできるなら最上であろう。このような生活のし方のうち、或る一つを決めて実行しようとするれば必ず家の中の誰彼の生活との間に調整を行なわなければならない。この調整を行なっても実現不可能な場合がある。ヘヤが1つしかないのに兄弟別々に使いたい場合である。こんなときその生活を実現しようとするなら、それは一家内の調整で納めてしまうことはできない。矛盾を外の機構の調整で解決しなければならないことになる。

このように、単位生活体の統一の集合である複合生活体は、その中における生活矛盾をその生活組織内の問題として解決することもできるが、生活組織外の問題として解決しなければならない場合も起こる。生活矛盾は、生活複合体を構成する生活体が、どのような流れの型をとるかでお互ぶつかり合うことを言う。

以上述べて来たことでわかるように、生活は流れをなしているが、その流れは幾通りも行き方があり、その中の一つを選ぶとき他の生活との関係で生活矛盾が起こり、その生活矛盾解消のため対内的なまたは対外的な全体調整の力が働く、と言うことである。この調整の力を持っている生活体を調整体と言ひ、家族のそれを家族調整体、ムラのそれをムラ調整体、市町村等のそれを市町村調整体と言うことにする。この調整体の糾化されたもの・統一化がはっきりされたものが政治である。しかし、複合体内の生活主体を個々に統一の方向に向けるためには政治だけでなく、宗教乃至イデオロギーの力が働く。このような力が合一して、或る生活が選ばれ、全体の中で調整され位置づけられて実現するのである。図に画けば、下のようになる。



## 2 農村住宅内の生活構造

### 1) 農村住宅内の生活行為構造

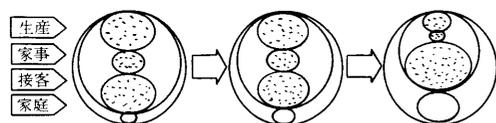
農家の生活を大分けにすると、〈生産生活〉・〈接客交友〉・〈家族生活〉になるだろう。最後の〈家族生活〉は〈家族の目的生活〉とそれを与えるための〈家族の準備後始末行為・介助行為〉に分かれるであろう。〈家族生活〉が住宅乃至屋敷内で行なわれるとき、われわれは〈家庭生活〉と言っているようである。家庭で行なわれる最後の〈家族の準備後始末行為・介助行為〉を、われわれは一般に〈家事〉と呼んでいる。

別な分け方をすると、〈労働を含んだ生活〉と〈労働を含まない生活〉に分かれる。〈生産〉〈準備後始末・介助〉は労働を含み、〈接客交友〉〈目的生活〉は労働を含まない。

また、〈外化される〉と一般に考えられているものと、〈外化されない〉ものに分けることができる。〈生産〉〈接客〉は人によっては外化されると考えられるし、〈目的〉〈家事〉はそうではない。

私が証明しようとしたのは、〈接客〉はなかなか外化できないものであり、住宅を使用する生活の中で重きをなし、位置も広さも優位なものを要求するので、家族の〈目的〉生活や〈家事〉生活の場を圧迫する、そしてその場所選び・大きさ選び・しつらえの選びは、建築家の恣意では変えられない、ということであった。2章3章4章でこのことを述べて来たわけであるが、こゝで一括して図で示そう。

図は三代にわたる諸生活の空間の変遷について概念的にとり見た。勿論根拠は精密調査にあるわけであるが、それを今回は生データで出せないで、このようにする。



(注) 文中“目的生活”となっているが  
図中では“家庭”となっている。

### 2) 農村住宅を使って成立する生活の変遷

大体の傾向は図で示した通りであるが、更に中に立入って見ることにしよう。

#### ⅰ 生産作業は或る一部を除いて、極度に少なくなった。

縄ない・俵づくり・機俵づくり・蚕網づくり・ゾーリづくり・ワラすぐり・ワラたき等の藁仕事は殆んどなくなり、米麦の俵積みも保管缶の発達でなくなった。脱穀や穂打ち・穀物の山よせ等の穀類の作業もなくなり乾燥途中のものを収納することも一部エンガワを使う位で

なくなった。養蚕も掃立量が激減し少なくなったが、タバコを住宅に吊し作業することも極く少なくなった。野菜精選も住宅内使用は少なくなった。馬や牛も飼養しなくなった。草刈もしなくなったから、大きな目籠を土間に置くこともなくなった。飼桶や草を置くこともなくなった。ミノ(ケダイとも言う)やカサ(かむる)も置かなくなった。ビニールの外被である。仕事着の着がえも泥・汗がつかなくなったので、洗濯数もへり、洗濯場所もとらなくなった。総じて、お金を得るための作業は、家の中では行なわなくなったのである。つまり、併用住宅ではなくなりつつあると言うことである。

#### ⅱ 家事作業は、減るのもあるが新しく発展するのもあり、変化した。

食物。まず醤油をつくらなくなり次に味噌を少なくするかつくらない家が出た。更に、漬物を大量につけなくなった。これらは、作業も保存も、土間のかかなり広い面積を必要とした。台所が改善されて、手狭に能率よく調理ができるようになったので、土間に余裕ができた。また、大量の大根や芋類を干乾または保管するための下作業や床下保管・地下室保管等が少なくなった。

衣関係。製糸・はたおり。綿のとり入れ・糸にするまでの作業等は明治時代になくなったが、蚕の繭から糸にするのも戦後なくなってしまった。勿論、枠上げしたり・かえしたり・経たりの作業もなくなったのである。染色もない。はたおりもしなくなった。

裁縫も、既成品を買うことが多くなり、和服から洋服化への傾向もあるので、冬裁縫している主婦や夫人をあまり見ない。足袋修理をしている老人もあまり見かけない。勿論、するときには人の来ない縫物をひろげておけるところを当てるのは、昔と変らない。フトンも購買が多くなり、昔のようにザシキ一杯にひろげてつくることは減ってきている。

干し物。洗濯物は、逆に家の中に干すようになった。ガラス戸が入った広縁一杯に干し物を干している家をかかなり見かけたが、ガラス戸が入り廊下が拡げられて干す場所ができたからと言うだけでなく、農家が忙しくなり、干し物をとり入れたたりしなくて済むようにそうしていることがある。このため、接客行為(便所へ行く時)や家族の生活に不便を来たしている面がある。が、これはひるがえって見ると、農家に洗濯物乾燥機が要請されることが読みとれる。このような忙しさであるから、フトン干し作業は屋外に干すのは、家族全部が働きに出る農家では問題である。フトン上げられないとか、そのへやに積むとかの家も多く、へやと干し場の連結を要求していることが分かる。但し、収納空間がないからこのようになる面もある。

洗濯は機械化され、時間も短縮されたので、フロバの脇なり前の軒下なり家屋内屋根下内で行なわれるように

なった。家の中または屋根の下で増えた家事作業の一つであろう。

水。カメの水汲みはなくなり、飼水（米とぎ汁等）をタルまたはバケツで出す作業もなくなった。フロへの水汲みもなくなり、このための幅広い通路も必要なくなった。

火。カマドに小枝・松葉・桑手等をくべることもなくなり、また接客用のイロリまたは火鉢にマキ・桑手等をくべることも、フロにマキヤクワノ根等をくべることもなくなった。カマドやフロには、タキギ置場が必要だったから、これだけでも火口の前の場所は狭くてすむようになり、更にカマドやフロガマの形がそれまでとは違ったガスや油等の燃料を使うようになったので小さくなった。それ故、火をつかうところは全体として非常に小さくなったと言える。

下足なども、下駄ではなくなり、下駄箱も揃って来たので、片づく度合が多くなったが、長靴などは以前より買い易くなったため、土間を多く塞ぐようになった家もある。特に雪の多い地方がそうなのである。

掃除も、忙しくなったからでもあるが、家族の人数も減り、家に残る人も少ないので、掃き・雑巾がけ共に少なくなったようである。子供を仕事に使わなくなったこともある。また、内装床張りが新建材になって来たので掃除をする必要が減ったことや開口部がアルミサッシュ等のガラス戸になり気密になったので、埃がとび込まなくなったこと、等も関係して来よう。

iii 接客は、形や内容を変え、部分的にはむしろ盛大になっている。

冠。七五三等の昔のしきたりはすたれつつある。勿論元服も農家であるからないが、成人式は、市町村単位でやっている。最近盛んに見られるようになったのが、バースディパーティである。学校で指導しているとも聞くが、八郷町などでは6,000戸なのにかかなり大きなお菓子屋が成立しており、よくバースディケーキが出ると言うことであった。

(注) 人間の年齢による折目節目の行事を一応  
<冠>の中一括した。

婚。以前は、親類と地域（ムラ）の人がお客の中心であった。

式は親類の固めの式がまずあり、宴になると、その間に本人同志の固めの式がうらのへやで行なわれる。この時は、仲人・付人それにおばさんと言うムラの中の近隣集団の世話役の老女が入り、そこではじめてそのムラのこと、嫁いだ家のことを嫁は知らされる。従って、これは純粋に2人だけの式でなく、近隣も入った話し合いの場になるのである。

ムラの人への挨拶は親類の宴が済んでから行なわれる。ムラの人々の宴が終わり、手伝いに来てくれた人に対する

挨拶がある。これは女の人の集団である。

この四つの固めは昔も今も必ず行なわれるが、日数は戦前においては階級階層によって異なっていた。3日の人もあれば、2日の人もあった。現在は大体2日である。最後の女の人への挨拶が翌日になるのである。八郷町茨城県下の調査したところはこのようであった。が他県では、本人同志の固めは親類の面前での三三九度である場合が多く、親類の人と分離した場所と言うことは聞かなかった。しかし、このところは今後更に追求する必要がある。

こゝで注意しなければならないのは、以前と違ったのは、日数は減って来たが友人の参加・職場の人達の参加があるということである。これによって、参加人数は現在かなり増えた。しかし、現在このように多勢集ってもその日のうちに帰る人が多く、泊る人は少ない。少し遠くても自動車や自転車で来れるからである。昔はこうは行かなかった。客は遠い時は泊るのが原則である。当家だけでは泊め切れないから、親類も頼んで泊める。しかし、このようにして、一夜を共にすることによって、新しく親類になった人・日頃疎遠だった親戚が親密度を増すのである。冬の農閑期と言うのがこのような祝を宴す時期に当たり、農家の人々にこのような事を行なう時間の余裕を与えた。現在は、招ばれる人数は多くなったが、浅いつき合いで終りになる。そして、親類の結集は影がやや薄れて来ている。それでも、自分の家で式をあげ宴を催した場合、嫁さんを他家の主人も主婦も見ているので、知っているのである。新嫁さんは、女の人々の集団には自らも幼き姿で入って掃除や宴の後片づけ等の作業に加わるので、顔ばかりでなく人となりなども分かり、ムラの中にとけ込むきっかけができるのである。

しかし、最近町の会館や旅館・ホテル等で挙式する例も出て来たと言う。そんな場合、見知らぬ若い女の人が入り、「あ、あれが〇〇さんの家の嫁か」などと噂するのだそうである。このような結婚式は、親戚は或る程度出席するとしても親等も限られ、地域なども代表が出るようになり、より友人的より職場仲間的な式になるので、ムラの人には新しい嫁さんのことを知る事ができず、だんだんムラのことから分かってなくなるのだそうである。

婚は、このように血縁・地縁を新たにつくり出したりこれまであったものを強化する作用があるので、自宅使用が強く望まれているのであると推量される。たゞ、準都市化した混住地帯の婚の様式はどうなるのか、今後研究して行く必要がある。

葬。土葬であるので、火葬場のあるところとは様子が異なる。火葬場のあるところは、まずカマの予約から始まって日取りが決まるのが一般である。が、土葬の場合は死者を鄭重に扱うよう日取りが決められる。それは、つげを受けた人が集まれるような日であり、友引等忌日を

避けて取られた日である。大体3日目位が多いが、4日目とか人によって長く置かれる人もある。長く置かれる人は身分の高い人偉い人と言うことも言われているようである。死が確定すると、死床が北向きに直される。そして葬儀までの間に2人1組の「つげ」が何方面にも出され、「買物」がされ、行列のための花籠づくりが行なわれ、穴が当番によって掘られる。そして屍体はユカンされて清められ納棺される。通夜もある。これらに必要な作業は、すべて近隣・親族の手でなされた。

葬儀の日は、北向きの棺の隣に花(金属製)がそえられ、読経と焼香の準備がなされる。一番奥のトコノマのあるヘヤに棺が置かれることが多く、ここに坊さんと家族が入り、余裕があれば親類も入る。そして、更に多くの親類縁者は次の間に並ぶのである。以前は、大体床上ザシキ内に参加者は上れたと言う。最近では、棺を横にしてその上に祭壇をつくり、その上に写真・生花、脇にも盛花を置く方式が流行している。葬儀社も一軒あり、専門職がやるので、隣近所・親戚等は手を出すことが少なくなった。そのように奥のヘヤが祭壇によって占領されるので、そのヘヤには坊さんと遺族ぐらいしか坐れなくなり、その上参集する人が以前より多くなったので、庭に立つ人が多くなった。自動車等で容易に集れるようになったので余計集る外、死者が生前人と多くの関係を持つようになったと言うことであろう。以前は速くから来る人は、一般には親戚であったが、現在はいろいろの関係の友人・知人・縁のある人・職場の人等で、農村の人たちの活動の変化を示している。また、昭和10年過ぎまであまりなかった造花の花輪が飾られるようになり、庭もにぎやかになった。従って、葬儀場は以前の家の中から庭まで拡大されているのである。

葬儀までの日、棺安置などで場所がとられ通夜などで人が集ったりするので、親類や近所の家を借りることは屢々である。葬儀の日も、昔は泊る人が多かった。この人たちのため、自宅だけでなく、他の家も借りて宿泊所にした。このように、農村は相互に宿泊所になり合った。現在は当家に泊る人も少なくなった。また、泊る客の中には葬式のあった日から、淋しくないために暫く泊りに来てくれる人もあった。

一般に葬儀には、一番速い親類も来る。地域の人が下働きをして準備し、家族が中心になり親類・知人・縁者・地域の人で葬儀が行なわれるが、多くの人を外に立たねばならないため、その人達の中には寒くて身体をこわす人も出る。それで、どこか大きな斎場が要求されていると見なければならぬ。が、下働きのことを考えると、自宅でなければならぬ要素もあり、コミュニティオルガニゼーションの意味も含んでこれは要求されているとも見られる。この矛盾した要求にどうこたえるか。キリスト教が普及している西方や南方の島嶼では、家で10

人以内位のお通夜をし、教会で葬儀をすると言う。これなどは、一つの参考にはなるであろう。今後の研究題目と考えられる。

祭。地方によっては、祭りの神様が家々をまわり、神を迎えるべく招かれた親類の人と一緒に席を設けて宴をはるところに神が行き、家々の中の1ヘヤ1ヘヤ人がいるか探して獅子が囃んだりスミをつけたりして行くのもあるが、八郷地区ではそのような祭りについては聞かなかった。祭りはあるが、家々をまわるか、不明である。今後、祭りに親類を招ぶか、神様が入るか、等研究する必要がある。

正月。ムラの人の子アイサツまわりがあったが、アイサツの場所神棚をつくったり、メ縄をしたりすることが、群馬県のように盛大ではない。現在は、家から出た子供達の家族の集り場に変化している家が多い。お正月用飾りは非常に少ない。が、人がアイサツをかわすヘヤに、大神宮様が置かれている場合が多い。

何故こう言うものがあるのか。これこそ本研究の核心とも言うべき研究テーマである。私が考えるには、これがこの家を中心とした近隣集団とのかゝり合いの心理的表象(神象)だと見るのである。仮空の調整者、それもやゝ我田引水的な調整者で、自分よりもまた他家よりも上に立ち、且つ何人からもそれがそうと認められているもの、と考えるのである。これを図化すれば、下の図のようになる。近隣・地域集団の再結集の象徴と考えられる。

お盆。正月とは逆に、親類集団のその家を中心とした再結集のための行事で、心理的仮象の調整者・守護者・監視者は、その家の先祖がなった「仏」である。これは、正月の神棚程ザシキと密接につながっていない。新潟県ではオクの間うらに仏間がある。八郷では新盆のとき、盆棚をつくる。これは、仏間がない地方だからだろうか。これは対馬でも持った疑問であるが、今後深めて行きたい点である。

以上を総括すると、冠・婚・葬・祭は、形はかわり内容も変化した。住宅を使用する規模は大きくなっていると言うことができる。そして、住宅使用に執着し、入り口側またはそれに近い所を占拠することに優位性を与えている。何故なのか。

正月のところの図で示したように、接客と言うのは、その家が社会の中に入ってその中から分け前を得るまたは得るための条件を得る組織を折目節目のつき合いの中で再生産して行く行為であるから、と考えられる。これは、マルセル・モースの贈与論から、C・レヴィ=ストロースの人類の集団構成論(構造人類学)をたどって行くと、その先に思いつく構想なのである。レヴィ=ストロースは、人間も贈与の対象だと考えた。私は、エンターテインメントも人と人をつ結びつけるもの、広い意味の

贈与と考えられる、と考えた。そして、農村のように、血縁と地縁とよりは頼るもののない経営体は、このようにして結合を強化する、そのためザンキが必要とされ、と考えたのである。

#### IV 自我の生活は芽生え・生長し・拡大しつつある

子供の自我を例にとったが、子供の場合が一番はっきり出て来るのであろう。これは

- 就寝場所の固定化
- 就寝場所と更衣場所・衣料収納施設の凝集化
- 勉強場所の一定化
- 勉強空間の家具化
- 勉強空間の固定化
- 就寝勉強空間の一体化
- 就寝勉強空間の個室化

のような指標で見て行くことができよう。一つずつ世代が進むに従って、実現して行っている。おじいさんは勉強しない、父親は非固定空間で勉強する、若い子供は固定空間または自室で勉強可能である、とか言う風に。就寝も、同様であり、タンスの持ち方凝集のし方等も同様である。

これを見ると、子供は自分の世界をつくるため、自らの生活空間を自由にでき持つことを要求していると見ることができる。

#### V 老夫婦と若夫婦の関係が「老人支配一極型」(組み込み型)から「若核家族形成志向二極型」(相互半独立型)に移行した

以前は、子供は年寄りが面倒を見、一緒に寝、年老いてからは孫に面倒を見てもらう形が多かった。現在は、この方向はぐっと少なくなり、子供の父親母親が、家の中に更に若い者の住む家をつくり、そこで親子水入らずで暮らす形になった。勿論このようにキレイに行くわけではないが、基本的な筋がこのようになっていく。

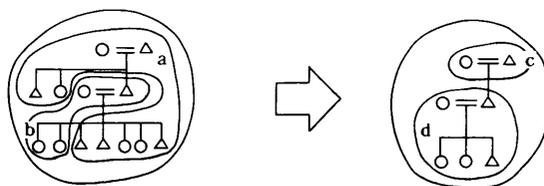
このようになった結果どうなったか。若夫婦は自分で子供と寝起きを共にし、自分で自分の子供を育てられるようになったのである。そして、親と子の関係は形から見ると、若核家族としての<公私>的生活である。私は、より自我が貫徹した生活と呼びたいが、居間あり各自のヘヤありである。老人は、もとの田の字型に住んでいるので、「接客空間」を含んだ家に住んでいることになる。若い人は接客空間を老人におしつけて自らはそれから逃れている形になっている。

老人に孫が育てられている時代は、子供(孫)はこのように独立が得られない。いつまでも従属した形、目上に奉仕する形、家の都合で自分が動かされる場合すぐ動けるよう待機している形(姿勢)であった。日本人の大義のためにはすゝんで上官の命に服するとか、自ら先を読んで目上に喜ばれるような手を打つ訓練が、小さいときから行なわれたのではあるまいか。これらの良否について

でも、今後実際に則して検討して見なければならぬことであろう。

就寝室とか就寝の状態とかの形だけを追求していたのでは、何がこのような生活の型を生み出すかわからないのである。空間形成の社会背景に関する研究が是非必要であるが、これは従来の社会学にも入らないし、建築計画学の中でも見ることができないものである。新たに開発の必要な部門であろう。

たゞ、茨城の場合“はなれを持つ”形式の住宅が多く、“はなれ”に老人が住むので若核様家族は“母屋”に住むことになり、「接客」から逃れられない家が多い。この点群馬県と大いに異なる。群馬県では、若核様家族は、続き棟・別棟・2階等に住むことができるのであるから。



a 組：オモテノザンキで

b 組：ナンド、コタツザンキで

c 組：母屋のどこかで

(オモテが多くなった)

d 組：母屋以外の棟、母屋続棟、母屋2階等で

以前は、子供は少し大きくなると、次々に年寄りの組に入れられた。産児制限がなかったからこうしないと親が育てることができなかったからでもあるが、子供に生きて行く上でスタイルを与えたと考えられる。

親たちは、いつも小さい子供を数人持ち、西北や北側の寒い暗いヘヤで暮らしていたのである。

現在は、家族人数も少なくなったが、親は子供達と都市の家族生活のような形で暮らしている。勿論、炊事場やフロバ・便所等は全体の中にあり、若核様家族が特別に持っていない。しかし、最近では、これらさえ別に設ける家も出現したのである。

(八郎湯干拓地の例)

### 3) 生活相互の葛藤

<生産生活>はへこみ、<家事作業>も少なくなり、残る<接客>生活と<目的>生活とが増大して良い場所をとるため葛藤していると見ることができる。しかし、農家が接客のために2間続きのヘヤを与え、それも表のよい場所を与えていることに目を向けなければならない。これは何故か。こう言うことがどうして起こるのか。このことの中に、このような現象をひき起すもとなる力が潜んでいることを見抜かなければならない。

### 3 生活空間の形成の底に潜む力

<接客>を重んじ<家庭生活>をその次にする現象は分った。では何故そうなるのか。しなければならないのか。

## 1) 農村における生活存立のための依存関係、「おもて」の空間を発生させる力

都市と農村では、暮らしをたてて行く行き方が異なる。それを特徴的に記せば、農村における生活存立の条件は次のようになる。

### i 土地が基本になっている

農業は土地がなければできない。都市では土地がなくても生きて行ける。農村では、たとえ借地であっても土地がなくては生きて行けない。農業労働者であろうとも、雇主が土地を持ち、それを耕作（加工）することによって被傭者も生活が立つようになっている。都市では、土地を加工（耕作等）して生計を立てることはまずない。

この土地問題は、人と人との間を定める大きな要素になっている。これは、土地そのものを抑える（地主小作関係）ことによって・相互の干渉（隣地隣人関係）によって・労働のための関係（雇傭関係・ユイ関係）によって、生れる。水田稲作を基本とした農業地帯ではこの関係が一段と強い。従って、生産を続行するためには、常に関係のある人達に気をつかわなければならない。常なる相互関係の確認・強化が必要である。

### ii 移動が困難であり、仲間を外れることも困難である

アメリカの西部開拓では、その土地が気に入らなければ容易に外所に移ることができたし、気に入っていたとしてもより遠くへ入植したいと思ったら移動することが可能であった。自由な土地の入手である。日本ではこうは行かない。祖先伝来の土地にしがみついているようなところがある。現在は様子が大幅変って来たが、アメリカのように年1割に近い農場の売買などは行なわれない。土地の流動は少ない。牧場と異なり、水路や畦道が必要であり、長い間かゝって育て上げて来た土壌があるから、買う方もこのような条件込みで買わねばならないので買方の人数や居住条件、経済条件等が制限されてしまい、結局はうまく売れないし、売り方も農村から都市へ都市から農村へと自由に職業替えてできないので売れないと言う条件も重なって、土地が動かないものと思われる。これは「出稼ぎ」現象と言う形になって表れている。自分の土地は手放さず、一時的に都市に出る。多くの悲劇が生れているが、それは職業を都市で自由に与えない全体社会の保証体制の弱さにも原因がある。それを次に述べる。

### iii 社会の保証が限られている

都市では、職業の転換・集団からの離脱は比較的楽であり、ムラハチブもなく日常の生活ができることは前に述べたが、その上にいろいろ社会的な面で生活の面倒を見てくれる団体がある。労働組合だとか商工団体である。その他、消費者団体・文化団体・教育団体等に。これらに問題を持ち込めば、現在制限つきではあるが農村の人人にくらべたら比較にならない程個人の尊厳を基礎にした方策の援助が得られる。それに、全体として個々が自

由であり平等であることが原則とされる個人の自立がみとめられ、それに対する権利意識さえ芽生えている。「俺は俺だ」と言うことと、そう言っても抑えつけられない「生活の保証」である。

農村にはこう言う自由・平等・自立と言うような全体的雰囲気は少ないし、それを保証する社会集団もなかった。以前は、自由・平等・自立などの精神は皆無であったろう。現在でも、「誰かに依存」する心理的雰囲気は強い。では農村の人達は何に頼っていたのか。

小作人組合乃至農民組合が設立され力をふるった大正末から戦後暫くの間を除いて、農村の人達が頼りにして来たのは<血縁>と<地縁>の力であった。<血縁>は、実際の相互扶助もあるが自らの勢力を他に示す示威的集団の面が強かったとも解釈できる。それに比べ<地縁>は、そこに住んでいるから相互扶助をせねばならないと言う面が強い。これは、生産ばかりでなく消費にもわたり、むしろ最近では消費生活のための相互扶助が多いようである。この両者の日常生活的非日常的生活上のでき事に対応するためつくられる近隣組織・ムラ組織である。このように、生活を守ってくれるまたは生活基盤をムラの全体の中で位置づけてくれるのはこの<血縁><地縁>しかなかったから、人々は皆<血縁><地縁>に注意を払はねばならなかったのである。

### iv <血縁><地縁>の再確認・強化

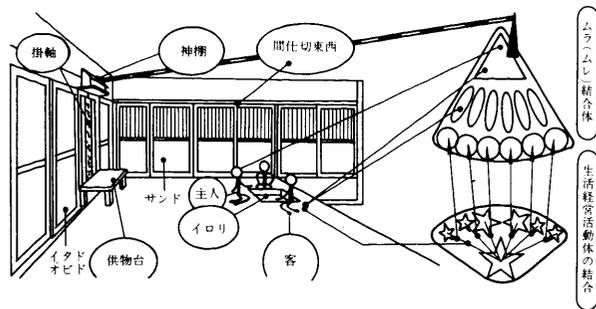
この<血縁><地縁>の再確認・強化が、正月とお盆とお祭り、それに結婚式と葬式である。食べて行くための基礎をなす社会関係を築くのであるから、どうしても重要視され優位性を持たされる。

### v <生産縁>の発生

都市で言えば、商工団体に当たるが、農業が企業型に移行するに従って、<生産縁>が発生する。牧畜業者は牧畜業者同志、養鶏業者は養鶏業者同志、大農は大農同志と言うように。しかし、これはムラを越えた遠いつき合いなので、相互扶助まで入れない。日常生活はやはり近隣組織で解決される。

### vi <生活縁>の進行

都市では、一緒に住むと言うことだけで、人と人とのつながりが発生する。これを「コミュニティ」と言っているようであるが、農村も、近隣集団はだんだん内容がこのように変化して来つつある。生活道路・側溝・街灯・水道・ゴミ処理等。しかし、ムラとしての機能も残っており、お正月やお盆は家から来た人達の集りでムラ人に関係なくなるとは言え結婚式や葬式には<ムラ>としての力が発揮される。時にこれが著しいのが選挙であろう。だれか市町村会議員を推そうと言うとき、どうしてもブラックぐらみになってしまう。これは何故なのか、今后研究を要するところであるが、<ムラ>の性質をかいま見る資料としては好適のものであろう。



## 2) 家族の「うち」の生活の発展、「うち」の空間を発展させる力

冠・婚・葬・祭のための住宅使用を「おもて」の生活とすれば、目的生活や家事作業は「うち」の生活である。この「うち」の生活が発展した。それが＜自分の世界の確立＞の方向に発展したことはすでに述べたところであるが、その発展のありさまは、＜自我＞の確立の形である。まず、個人または集団（例えば夫婦）の存在（生活の存在）が認められ、次にその空間占拠の力が認められる。或いは逆かも知れない、空間占拠されたので個人を認めざるを得ないと。実際は、時代と共に親が分って来て、子供に言われる前からヘヤを与えたりするケースが多くなっている。親の心の中には、子供の存在を認め、その生活形態がどうあるべきかの生活計画が社会の影響を受けてすでにでき上っているのではあるまいか。

しかし、ヘヤを与える前にすでに子供達は「生活の凝集化」をはかっているのである。これは一世代程の時間間隔で人々の心の中に蓄積され、「俺はこうやってもらえなかったから」と言う反省となって子供を処遇する段階にそれがあらわれるのである。

このように、＜子供自身の生活凝集・空間占拠の力＞この力は実力行使的な面を持っているがその力と、親が子供にしてやりたい力とが一緒になって、＜自我空間＞は形成される。たゞ、親が子供に空間を与える場合でも、「おもて」の部の空間には与えず「うち」の部の空間の中に与える。この「うち」の部は、群馬県などでは最近では2階の方にまで延ばされ、子供ばかりでなく若夫婦のヘヤも確保するようになった。子供と親とが核家族に似て住むようになったのである。

## 3) 「おもて」の空間を生み出す力と「うち」の空間を生み出す力を統一する調整力はあるのか

現在研究がそこまで行かないから、断言はできないが、「おもて」の部分に家族の「居間」を持って来たら本家からそこに置かないでくれと言われた、またもとの「うち」の空間に戻した例があり、公私室型の都市式住宅をつくったら親類が上りにくいと言うので寄りつかなくなったと言う例も聞いたことがあるが、このような例で判断すると、「おもて」と「うち」のバランスを決めるのは、その家の考えばかりでなく、或る形態の農村社会の

社会意識であると考えられるのである。

4) 以上で、農村における農家住宅の平面が、どのような見えない力で決められるのかの一端を垣間見たと思う。このように生活空間は代謝する統一複合生活つまり動的な生活構造の中から、その部分的分節である生活体の一構成要素として形成されて来るのである。今後、以上の所論を仮説として更に真偽を固めるとともに、これ以外の問題点や仮説が出て来るか、見て行かなければならないと考えている。